

群馬県無形文化財緊急調査報告書
群馬県教育委員会編

岩 島 の 麻

序

麻の纖維を使用した織物は「布（ぬの）」と称されるなど、古い時代から衣料や縄、綱等に広く利用されてきました。あのサラツとした感触の蚊帳は日本の夏を象徴する風物としても、わたしたちの心に鮮かなものでした。しかし、戦後急速に発達してきた化学纖維よりも、麻を利用した製品は次々と姿を消し、近頃では全くといってよいほど見あたらなくなりました。

群馬県では、その風土・社会・経済の情況を反映して、歴史的にも養蚕・製糸・絹織物が代表的な産業でした。しかし、西上州の甘藷や吾妻地方を中心にして、麻の栽培も忘れてはならない重要な産業として、長い歴史を継承してきました。特に、明治時代以後、吾妻の麻はその品質の優秀さにより全国に知られるほどであり、吾妻町を中心とした地域は夏になると一面の麻畑でした。それが、昭和三十年代からの化学纖維の普及に押されて、麻生産農家は次第に作物を転換し、今では吾妻郡岩島地区にほんの教戸が麻を作っているに過ぎぬという状態になってしまいました。

このような時代の変化により、吾妻麻の品質を支えてきた栽培、精麻の技術等が失われようとしています。

そこで、群馬県教育委員会では無形文化財緊急調査として、岩島地区の麻づくりについて調査を実施し、このたび、その調査報告書ができましたので刊行します。ひろくみなさまに利用されますようお願いしております。

末筆ながら、調査ならびに報告書作成にご協力いただきました方々に心から感謝の意を表します。

昭和五十三年一月

群馬県教育委員会

教育長 山川 武正

目次

序
目次

無形文化財緊急調査実施要綱

1

はじめに

2

一、大麻概観

二、岩島の麻づくり

三、調査にご協力いただいた方々

大麻栽培と加工について

9

一、栽培

二、生麻処理作業

三、加工

四、大麻栽培者免許証と誓約書

五、大麻製品の諸道具類

六、害虫

麻づくりと商取引関係

41

一、麻の栽培

二、麻コギ、湯かけ

三、ネド入れ

四、麻挽き

五、麻の格付けと取引

六、皮麻・副産物

七、雑

八、資料

古文書から見た岩島の麻

84

無形文化財緊急調査実施要綱

1 趣 旨

本県には多種多様な無形文化財が存在しているが、社会生活の変化等により、急速に消滅しようとしている。

そこで、特に重要なものとして緊急に保存対策を講じなければならない無形文化財について、調査のうえ記録を作成し、保存対策の基礎資料とする。

2 調査対象

「岩島の麻」(吾妻郡吾妻町岩島)

岩島の麻(大麻)の栽培、生産の明確な起源については不明であるが、「加沢記」によれば天正の頃には栽培していたことが推定される。

近代に入り、明治三十七年の吾妻麻信用購買組合の結成が契機となり、それまで地方的小生産にとどまっていたものが、全国的市場にも登場する名産品となり、それ以後も順調な発展を遂げ、本県の麻生産の一大中心地を形成した。

しかし、第二次大戦後は「繊維革命」の影響をまともにかぶり、昭和三十年以後衰退の一途をたどり、最近ではその生産技術を伝える農家も数戸にすぎない。

3 調査主体者

群馬県教育委員会

4 調査協力機関

吾妻町教育委員会

5 調査員

海野恭齊 神職

阪本英一 県立博物館学芸課長

唐沢定市 県史編さん室調査員

6 調査方法及び対象

(1) 図書及び写真撮影

(2) 生産技術調査

(3) 生産用具調査

(4) 関係文書調査

7 調査内容

(1) 麻栽培及び麻生産の由来と歴史

(2) 吾妻麻の商品流通史調査

は じ め に

- (3) 関係文書の所在調査及び解説
- (4) 麻精製の工程と用具
- (5) 生産技術の継承等

8. まとめ

- (1) 関係資料の保存
- (2) 調査報告書「岩島の麻」作成

一、大麻概観

一般に麻(あさ)という場合、タイマ(大麻)をさすことが多い。しかし、大麻に類似した長い繊維材料となる植物の総称としてアサという表現が使われてきており、アサかならずしも大麻を意味するとは限らない。アサと総称される長繊維植物は、「じん皮繊維」を利用するものと、「組織繊維」をとるものの二つに大別される。前者には、アマ、マオ(カラムシ)、コウマ(ツナソ)などがあり、後者は、マニラアサ、ニュージールランドアサ、モーリシャスアサ、サイザルアサなど主として熱帯地方に産するものがある。タイマは「じん皮繊維」を利用する代表的なアサである。

大麻はクワ科に属する一年生の草本で、一ノ三メートルの高さに生育する。原産地は中部ノ南部のロシア地方(現在のソライエト連邦内)と考えられ、現在でも大麻繊維の世界生産量の約五〇パーセントがソ連邦内で生産されている。そのほか、イタリヤ、ユーゴスラビアなどのヨーロッパで産額が多い。

繊維をとる茎の色は青緑色または赤緑色で、まばらに植えるので分枝が著しいので繊維をとるには不都合になるのと、倒伏しやすいなど不都合な点があるので、密植される。葉は七ノ九の小葉からなる掌状葉である。雌雄異株で、雄花は五枚のガク片と五本の雄しべを有し、枝端に総状をなす。雌花は枝端に近い葉エキに生じるが、花弁がなく、たゞ一個のガク片が子房を包んでいる極めて小さいもので、よほど注意しないと見えない。子房は二本の花柱を有し、各子房は一個の種子を生ずる。子実は灰白色か黒色で、球状をしており(径二ノ三ミリメートル)、両側に稜がある。子実は約三〇パーセントの油分を含んでいる。

タイマ繊維の束束の長さは一ノ五メートルほどに達する。単繊維の長さは平均一五ノ二〇ミリメートル、その巾は一五ノ五〇ミクロトきわめて細長い。単繊維は長さの方向に多数の条線があり、直角の方向にヒビ割れがある。そのため伸度は一ノ三割と少なく

もろくて折れやすい。しかし、強度は大きく、一デニール当り五〜七グラムほどもある。しかも耐水性が豊かで腐敗しにくいという性質がある。これらの特徴を生かして、世界的にはヒモ、イト、帆布、袋物、夏衣料に利用される。

日本でも大麻の繊維が長くてよりあわせが容易なことから、早くから繊維原料として利用されてきた。麻布片は静岡県の登呂遺跡、北九州出土のかめ箱内などから発見されているので、稲づくりを中心とした農耕文化が大陸から流入した際に、その文化の一環としてたらされた可能性が大きい。(中国漢代の画像石には麻紡図がみいだされる)

三國志「魏志」東夷伝中の倭人の条(いわゆる、魏志倭人伝)の「……種木稻、木麻、蚕桑、蠶織、出細、紵綿、……」の記録、あるいは令義解卷三賦役令の「……凡調 絹、紵絲、綿布、並隨郷土所出。……正丁一人……布二丈六尺……」という記録等から、古代の衣料として 絹、紵絲、綿布、並隨郷土所出。……正丁一人……布二丈六尺…… という重要なことがわかる。もちろん、両繊維の特性から、「絹」は上流階級の衣料であり、「麻」は庶民衣料、日常繊維製品の原料として用途上の分化があったことも推定されよう。

中世には庶民文化の発展に伴い、麻製品の生産・品質の向上には顕著なものがあり、宇治布、信濃布、仁和寺布など麻の名産品も登場する。「青牙座」のように麻製品の独占的組織も活躍している。しかし、宋末にインドから中国へワタの栽培技術が入り、一四世紀には早くも朝鮮を経由して草棉花の種がもたらされている。「繊維革命」と称される木綿の登場である。一六世紀には、木綿の栽培は九州、瀬戸内地方、東海地方などに拡大している。「繊維の王様」ともいふべき多くの長所をそなえた綿製品は、衣料の中心的地位を占めてゆくようになる。しかし、従来の絹や麻は、この刺激により、その特性をより十分に發揮するという形をよぎなくされる。その結果、江戸時代に入ると、麻、生糸、木綿という三大繊維原料がその個性を十分に活用され、すぐれた製品が生まれた。

このように、長い伝統と技術を継承してきた麻にとって、昭和になって発明された化学繊維は決定的な脅威となった。特に、昭和三〇年代に急速に普及するに及び、麻は暴激的な打撃を蒙ることになり、麻の生産は全国的に衰微して行く。このことは、麻の特性が化学繊維と競合する上で、すべて覆写され、コストの上からも太刀打ちできなくなったことを意味している。

二、岩島の麻づくり

群馬県における麻生産も稲作文化の波及と共に始まっていると推定される。

富岡市一ノ宮の貫前神社の北方、高田川と丹生川とが合流するあたりで、阿蘇が丘とよばれる小さな丘がある。今では一面の桑園であるが、その中に立派な碑が建てられている。碑面には万葉仮名で、

上野の安蘇の真麻群かき抱き、寝れど飽かぬをあとか吾がせむ

と、万葉集の東歌が刻まれている。安蘇はアサからきているのであろうか。上野は当時より安蘇地方に代表されるように、真麻（大麻）の産地として人々に知られていたようである。古代人の衣料の中心が麻であったことは、衣料の神が大麻比古大神（天太玉命）であることでもわかる。上野も例外ではなかったばかりか、全国的にも栽培の盛んだつた地方であることを、この歌碑は物語っている。

麻栽培の立地条件として考えられる点は、次の五つに要約できる。

- (1) 茎の伸長をはかり、繊維の発育をうながすために、温度の急激な変化がなく、生育期間中降雨がかなりあり、空気湿度の高いところ。
- (2) 茎がたおれたり折れたりすると繊維の品質をおとすので、強風のないところ。
- (3) 繊維細胞膜の肥厚がうながされ、かつ収穫後の調製、乾燥のために、生育の後期から収穫期にかけては晴天の多いところ。
- (4) 土壌は砂質よりも有機質に富んだ排水のよい壤土をいし植壤土が適する。
- (5) 収穫後茎を浸水精練するので、水が豊富で便利なところ。

そこで、群馬県では麻の生産地としては、西上州が中心となつて行く（風土的な条件以外に、社会的、経済的条件が考えられるが本稿では省略する）。麻に関する江戸時代以前の資料はほとんど残っていないが、明治以後の状態をみても吾妻・甘楽が中心であることから間違いない。

吾妻地方で麻の栽培が盛んだつたのは、吾妻川の右岸・榛名山の北麓一帯（東村・長野原）である。昭和五十一年度現在、県内で唯一カ所麻栽培から精麻製造まで残っていた岩島地区は、昭和三十年の町村合併で吾妻町に合したところである。その岩島村は明治二十三年の町村合併で、岩下村、三島村・松谷村、矢倉村・郷原村・厚田村の六カ村が合併して成立したものであり、三島村に該当

するあたりが麻栽培にとつて最も勝れた立地条件をそなえていた。最も品質の良い麻製品は三島にかぎられていたと伝えられる。

岩島地区の麻は、江戸時代から現代に至るまで、ほとんど原料麻の段階で売りさばかれていた。鉄道・自動車道路が整備される以前から、馬により吾妻川に沿つて鳥居峠を越えて、北国街道を経て越後へ出ている。麻小屋の中に北国屋と称するものがあるほど北陸とのつながりが強かつた。吾妻町教育委員会の小泉好一社会教育係長の話では、樽前橋の上方の岩壁に次のような碑文が刻まれているという。(今回の調査時には既に失われており、見あたりなかつた)

奉寄進

一金拾両 米拾俵

発起施主 岩下村

片貝清兵衛

松尾村

竹淵音三郎

地元世話人 (氏名略)

弘化三丙午年十一月二日 此所修造之

とあり、再興寄進者の中に、「岩下村 越中麻買仲間中」「郷原邑之宿越中麻買仲間中」の文字があつたという。

この磨崖碑は、弘化三(一八四六)年に交通上の難所であつた吾妻深谷の道路を整備拡張した際のものであり、その資金を出した中に地元有志にまじつて、越中の麻買商人が含まれていたことを意味している。それだけ、この地方の麻が北陸方面に買われており、北陸の商人が活躍していた証左でもある。

明治までの様子は次のように伝えられている(昭和初期における地元の角田喜市の言)。

「吾妻郡ニ於ケル大麻ノ生産ハ最近ノモノニ非ズシテ二三百年以前ヨリ既ニ栽培ヲナシタルモノノ如シ。然レドモ其ノ産額ノ少ナキト交通ノ不便ナルトニ因リソノ需用地トノ密接ナル關係ヲ生ズルヲ得ズ。僅ニ栃木県ノ麻商人ニ依リテ他府県ニ移出セラレ栃木麻ト見ナサレテ使用セラレタルヤノ形跡アリ。又、品位混交シテ一定ノモノヲ使用スルニ不便ナル弊害アリテ、為ニ価格ノ向上ヲ阻害サレタル事モ少ナカラズ。新潟県・富山県・石川県等ノ麻商人ハ年々原産地タル本郡へ来リ、数十日間ヲ本郡ノ麻商

人・麻問屋等ニ止宿シ、製造人ノ各戸ニ就キ買出ニツトメタリ。故ニ製品滞積シタル場合ニハ頗ル低廉ナル価額ヲ以テ売却スル者少カラズ、又商人多数ノ場合ハ予想外ノ高値取引ヲ来ス場合モアリ（後略）

このことは、吾妻が原料生産地の立場にあり、各地から仕入れに來る麻買商人の価格操作により麻相場が完全に左右される状態にあることを示している。（注一）

このような状態を脱却するため、三島の角田忠三郎を代表とする二十七名が参加して、「吾妻麻組合」の母胎が結成され、肥料などの共同購入から始めて、麻の品質管理、そして販売事業へと着手している。（別表一）は組合での取扱量の變遷をまとめたものであるが、社会の変化を微妙に反映している。例えば、大正二（一九一三）年からの急増は第一次世界大戦の軍需増大による影響であり、大正十二（一九二三）年の落ち込みは関東大震災による社会的混乱の影響であろうか。いずれにしても、組合の成立により岩島地方の麻は発展の契機をつかんでいる。（別表二）

戦前までの吾妻麻は、（織物原料用）として富山・石川・奈良、（漁業用）として三重、千葉、静岡、宮城、愛媛、富山、島根、（弓弦用）として東京、埼玉、（蚊帳用）として愛知・東京・等々全国へ光り出している。品質的に見ると、高級品（最高級は「吾妻錦」と俗称す）は、鯉・鮎・鯛などの一本釣用糸、上等和服地、夏用洋服地、レース地、弓弦、かすみ網、祝賀贈答品、裝飾用品等。普通品は、漁網、帆布、蚊帳、畳べり、畳糸等。また、暖簾縄、むしろ糸、蜜網、各種の縄、網、雜貨品等は、比較的品質を低く評価されるものでも十分に利用できた。

岩島では麻の加工製品の製造という点では、大正以後度々試みられたにもかかわらず商品として足るものができなかつた。たゞ、昭和二十三年矢倉に麻糸加工場（斉藤万作経営）ができ、釣糸・畳糸を製造している。昭和二十五年には若岩島農業協同組合でも加工を始め、矢倉の斉藤工場を吸収し加工規模を拡張している。釣糸は勝浦・銚子・館山・焼津・小田原・佐渡・八丈島などの漁業基地が得意先で、織物用糸は高知・富山・奈良・新潟へ出ている。技術は斉藤氏が伊勢原市（神奈川）などで習得してきたという。昭和二十六年ノ三十二年頃が活況期で、手作業に従事する女性従業員が三十名ほど就業し、日産十キロほどの麻を加工している。

麻生産は昭和二十五年ノ三十二年が戦後の黄金時代で、栽培面積、生産高も戦前の盛時と比肩している。しかし、昭和三十年代に急速に普及して行く化学繊維に押されて、加工場が閉鎖に追い込まれる昭和三十五年からは急速に生産が落ちる。見渡すかぎりの麻畑はコンニャク畑・桑畑などに姿を変えていく。昭和四十五年には吾妻町全域で栽培面積五ヘクタール、精麻約三百キロになり、今

年度は、わずかに十三アール、栽培農家三戸という微々たる状態。しかも、三戸中の二戸は「来年はやめる」という情況であつた。このように急激な退潮期をむかえると、悪循環として用具面にも問題が生じる。麻生産の盛時には、その用具製造でも人々の生活が支えられてきたが、注文が激減することで生活が立ちゆかなくなり、転職を余儀なくされてしまう。その結果、麻づくりを続けたいという気持を持つていた人でも、破損した用具を買いかえることができず、やむなく廃棄という人も多く出たようである。

ある生産者を考える場合、何といつても「社会的需要」がカギをにぎり、それに関連して「流通機構」「経済性」「用具」等がからんで、生産者の技術の巧拙や産地の消長に大きな影響を与える。岩島の麻についても、化学繊維との「需要」「生産性」「品質」「価格」等の観合で、完全に敗北した結果として衰退に追い込まれたものだけに、文化財保護という見地だけではその栽培技術・精麻技術を社会的に継承してゆくことは不可能である。それでは「岩島の麻は絶える」ということになるのか。産葉革命以来の生産の歴史を考えれば、古い生産様式が生きかぶる可能性は極めて低いといわざるを得ない。しかし、このような場合に踏みとどまつた例から考えれば、「特殊性」の發揮ということ以外にはなさそうである。化学繊維では代替できない天然大麻の性質を生かしている部分は、些細ではあるが現在でもある。例えば、乾漆像や漆器製作に必要な漆の下地、茶ノ湯に使われる茶巾、それに、神事に欠かせない注連縄などである。今年度生産された岩島の麻も奈良県へ売られ、茶巾になるといふ。このへんに横たわつている大麻の特性を考慮し、新しい製品の開発や麻挽きカミソリ（おかき）を初めとする用具確保のための社会的援助、栽培補償に対する地元農業協同組合の協力や農政的援助等があれば、まだまだ消滅を回避することはできるであろう。そのために第一に必要なことは、地元・吾妻町をあげての工夫であろう。地元には、群馬テレビを通じて紹介された「麻ひき音頭」のようにすぐれた民謡の保存会もあり、岩島第二小学校や岩島中学校の校章も麻の葉を形どつている。これだけ親しまれてきた麻が、この地区に一本もなくなつてしまつたときに、この人々にとつて郷土とは何を感じさせるであろうか。

調査対象者であつた丸橋富久雄夫妻のように、麻づくりに情熱を注いでいる人もまだ健在であり、ご協力をいただいた岩島地区の多くの方々のまぶたには、夏の光を受けて青々と輝く一面の麻畑が昨日のことのように見えてかり、その耳には初秋の涼んだ空気を通して聞こえてくる家々の夜なべの麻挽きの音が、今でもはつきり残つているようであつた。

(別表1)

吾妻麻組合大麻取扱数量及び価額表

年 度	数 量	価 額
明治44年	794,000 貫	3,404,787 円
大正 元	1,927,000	6,764,915
2	6,347,000	17,583,598
3	5,030,635	12,174,627
4	1,779,675	3,587,665
5	1,222,790	5,798,740
6	1,424,930	7,841,050
7	1,224,990	8,168,300
8	531,263	6,632,000
9	733,280	4,019,360
10	879,953	8,668,560
11	809,983	4,630,200
12	247,892	2,042,070
13	332,558	3,173,900
14	535,040	4,069,550
昭和 元	1,079,927	6,349,780
2	581,053	4,944,970
3	698,905	5,666,360

(昭和4年発行「吾妻麻一斑」より)

三、調査にご協力いただいた方々

丸橋富久雄、丸橋とみよ、湯浅西象、湯浅栄太郎、丸橋祐二郎、小池良一、丸橋東吾(以上、吾妻町三島) 片貝亀禄、西山三
 次郎、西山弘太郎、脇屋真一(以上、吾妻町岩下) 斉藤万作、丸山不二夫(以上、吾妻町原町) 宮崎正男(岩島第二小学校長)

大麻栽培と加工について

大麻は温帯性の植物で、当吾妻地方では成熟期が短かく、旧岩島地区を中心として広く栽培したが、播種後収穫期まで一〇八―一五日を要す。麻の栽培には気候が大いに左右し、降霜が早く止む時は麻の成長が良いという。又、霜に次で温度の変化、暴風雨等により播種後収穫期迄に収穫絶無となる事もある。又、虫害等もあり、これ等が通順の時は豊作となる。

この様に気候に左右されつゝ大麻を栽培すれども、製麻作り三原則ともいふべき事に注意し製麻作りに専念した。

1 から、2 ねど、3 ひきと云い、「1 から」は播種後麻こき作業まで畑作り、肥料等の関係により生麻を良く作る事であり、「2 ねど」は生麻をねど入れし、その二・三日間の温度その他の管理具合良否であり、「3 ひき」は生麻のねど入れしたものを表皮を取る麻挽き技術の上手、下手の事で、この三原則とも云うべき事項が良好なる時に製麻の出来具合が良くなる。

精麻の質

製麻の二原則とも云うべき着目点は1色、2りき、にて1色は光沢にて薄黄色に光りあがるもの。2りきは精麻の引き切れるその力の強さ即ち力の丈夫なものを良しとする。又、繊維の細く長く元から天まで裂けるものを上質とする。

畑作り

以上の如き良き精麻を作るには畑作り作業も又大切の仕事であり、大麻播付け時の肥料も一反当り、堆肥二百貫匁、人糞尿百貫匁大豆粕十五貫匁、油粕十貫匁、の如きものを混合し、畑の隅に七山ぐらいに堆積し、約十日間程経つて、その山を細かく砕いて畦毎に施す。この外「だら肥」で播く場合、半切にいれ前記のものを入れ加え、やわらかくして畦毎にまき、その後種を播く場合もある。畑の地力や前作物等により肥料の加減をする。

一、栽培

(1) 播種期

一月より三月頃までに二、三回耕耘し、この時、肥料を打ち、土壌に混合させる。四月上旬より、中旬迄に晴天三、四日続き土



(1)



(2)

(写真1.2) 播種後20日位後の生麻（これを間引きする）

(2) 手入れ

播種後六、七日にて発芽する。その後約十日間を経た約一〇cm位に伸長した時を適度として、晴天の日を見て第一回の間引きを

畑のよく乾燥せし時を見て、金熊手にて土塊を崩壊して畑を平にし、よき乾燥時に畦巾二五cmノ三〇cm程の畦（作）をつくり、半切に溶解して水肥とした肥料を畦間に蒔き、その上に直接に種子一反歩に約四升を蒔く。畦間は普通の作物より狭く、これは生麻を密生させ枝の出るのを防ぎ、細く長く、柔かく成長させる為で、普通の畝では畦が出来ないので、麻畝と称する少し小型の麻作り専用の小畝にて一作ごとに肥料と種子を蒔き乍ら土を薄く平たくかけて種子を覆うてゆく。蒔き終つた後は畑は平になる。

行なり。これは生麻の間隔を均等にすゝる為に行ない、直ちに中耕を行なり。その後三〇cm前後に伸長した時に第二回の間引を行ない、巾一〇cm、一本一本の間隔五cmぐらゐとし、其の後は収穫期まで特別に施肥、中耕等も行わず、手入をしない。又、大麻の生長を計るため、播種時に条竹二五〇cmぐらゐのものを一畝に一本ぐらゐ立てて置き、大麻の生長の基準とする。

(写真3、4、5) 六月頃の生麻生長の姿



(3)



(4)

(写真3、4、5)

六月頃の生麻生長の姿



(5)



(写真6、7)

収穫期頃の生長した麻



(6)



(7)

(3) 収穫期及び方法

播種後一〇八日ノ一一五日を経過して収穫時となる。即ち七月下旬より八月上旬で、この頃になると生麻の葉は黄色味を帯びて来る。又、生麻の葉は最初是对生で生長し、七月末より、葉は互生になる。この頃を最適収穫期とする。この頃二五〇cmぐらいに生長している。



(写真 8)

収穫期の成長した生麻

(8)

(写真9) 成長期の対生葉



(写真10) 収穫期の互生葉



(4) 収穫の方法

七月下旬より八月上旬に入り、生麻の生長と時期を見て、晴天の日に麻抜きを麻畑の端より始める。この畦に一作ごとに、長麻（二階麻）、短麻、太麻、屑麻（こきそ）の五種に区別して抜ぐ。屑麻（コキノともいう）を一番先に抜き取り、一束（一にぎり）ぐらいにして別に取り出して置き、他の生麻の束収用に用いる。長さ約一m前後のもの。次に短麻、太麻と抜き取り、次に中麻、長麻と生麻の上部葉の処を一にぎりとして強く引き抜く。引抜いた麻は一にぎりづゝ根本を交互に重ね置き、抜き終るまでそのまゝとし、抜き終りした後、根切り、葉切りを行ない、種類別に束ねる。

畑の周囲の生麻は比較的太く、曲つて育つため二作ぐらい、種子用として余す。

11)



12)



13)



(写真 11、12、13)

生麻の収穫

二、生麻処理作業

扱ぎ終り、根本を交互に積み重ねて置いたものの生麻の根、葉を麻切縁にて打ち切る。その時に太麻、長麻、中麻、短麻、に区別して置く。その区別されたものを約30cmぐらいづつ一束として屑麻にて束ねる。切り取られた根葉は焼かれる。麻は油気多く生のまよよく焼ける。



(14) 生麻の根切り作業



(15) 生麻の葉切り作業

(写真16)

上より

太麻、長麻、中麻、短麻、屑麻の五種類



(写真17)

根葉焼き



根葉を切り取りした生麻を凡そ三〇cm廻りにして束ね、それを三箇束ねて、生麻一束という。

一束の生麻は本揃板の上にてよく本を揃えて長麻は六尺五寸、中麻六尺四寸、以下短麻は五尺八寸より六尺に、太麻は適度に押
鎌にて切り留める。太麻は皮が厚く良質の製麻とならないので特別の加工せず、川などに一週間程ひたし、皮をはいで皮麻として
売出す。

(写真18)

一束を三個集め一束としたもの



(18)

(写真19)

根本を本せろえ板の上にてせろえる



(19)

(写真20)

根本をそろえたものをそれぞれの長さに押鎌で押し切る。



(20)

(写真21)

未留めされた生麻



(21)

未留めされ押鎌にて切り出されたその末はうら麻として、太麻と共に川にひたし皮をはぎ「うら麻」として売られる。

(麻煮)

長麻、中麻、短麻はそれぞれの長さに切られ、一束としたものを、麻釜に湯を沸騰させ、生麻一束つゝ二・三分、最初は根の部



(22) 生麻を煮る約2、3分づゝ。

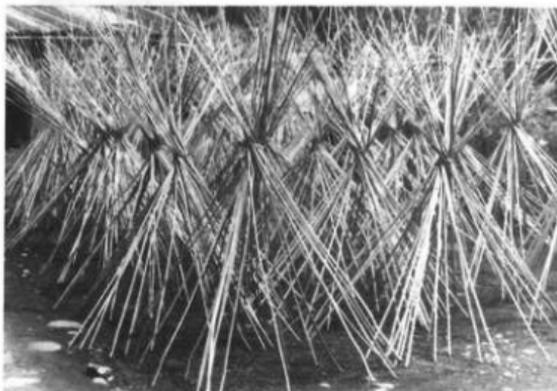


(23) 生麻の煮たものを干す

分を、次に上部を反対に入れて煮上げる。この煮上げたものを晴天の日に約十日間畑や庭等に一束づゝ根部を下に広げて乾燥する。この乾燥の際、雨にあい一部分ぬれた場所があれば、その点に「バクテリア」の発生を見て、黒点を生ずる。この黒点は製麻に現れて、不等品となるため、雨には充分注意する。夕立雨の時などせむしく取り入れて、又その日の内に干す作業など繰り返す。このようにして約十日間干す事により生麻は黄色に変色する。これに上湯と称し二度目の生麻煮を行ない、煮上げたものを一日間よく乾燥して屋内に次の作業まで貯蔵する。又、長雨にて外で乾燥できない場合があり、この時は前記と同様に、煮たものを屋内に広げ、火力で乾燥する場合もある。

三、加工

(1) ねど入れ



(24) 結び場所を少し下げて干す

生麻に上湯をかけ干揚がるのは八月下旬に、この干揚げたもの一束を四分して束ね、これを自家にて一日に加工処理出来る分量だけ、毎朝ねど入れをする。ねど入れとは麻舟に水を入れ一束を四分して束ねたものをこの水に浸し、乾燥しないようにねど倉と称する薄暗い処に入れ、横にしてコモの類を掛け温度凡そ三十七八度位とし（この時、重ねて置くので熱が出る）、一日に二回朝夕湿し、毎日自家にて処理出来る分量だけ加えて行く。その時に先に入れたものを下に、後からのものの上に順に重ねてコモ類を掛け、熱の散失と乾燥を防ぐようにし、翌日も、前日と同じように繰り返すこと約三日目頃に麻皮に粘気生じてくる。温度の低い時には四日目ぐらいの時もある。この時を麻が「よくねた」といい、はぎ取りの好時期として、麻はぎを行なう。



(25) ねど入れの水ひたし作業

(2) 麻 剥 ぎ

ねど入れて三日目頃、生麻に粘気を生じてきたものを取り出し、太いものは二、三本、普通ものは、四、五本あて左手に持ち、右手にて根本の方、約一〇cm位の処を折り、その時に皮の表と裏とをよくそろえ、折口の皮を右手に皮の表を下にして持ち、（おがら）の方を左手に持ち、皮の表を下にし内側を上にして剥ぎ取り、それを一手として細長く曲げ積み重ね、一束分（干麻一束分を四分したものと一結とする）として、次の麻挽き作業まで、日光に当たらないように屋内に掛けて置く。



(26) ねど倉にて貯蔵場面上にコマ類をかける



(29) 剥ぎ取られた麻皮

つた。

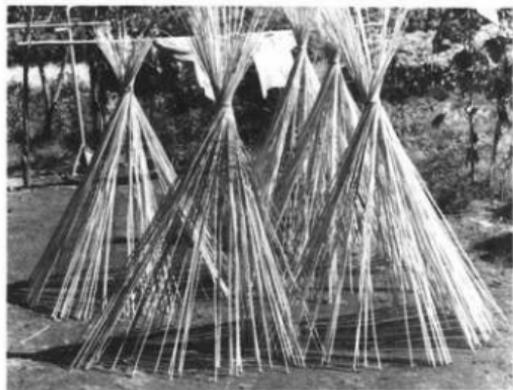
剥ぎ取られた麻皮は濡れたまま、日光に当たらないように壁内に、次の麻挽きまで保管して置く、麻剥き作業は女性の作業であ



(27) 麻剥き



(28) 剥いた麻皮を細長く曲げて置く



(30) 表皮を剥ぎ取られた麻から干し

生麻の表皮を剥ぎ取られた麻(お)からは、よく乾燥し、一束ごと
に束ね、屑屋根の材料、かいろ灰の材料として売られる。

(3) 麻 挽 き

腰掛け、麻挽き台、麻挽(おか)き、膝杖、等を準備し、その左方に麻殻より剥ぎ取り、細長く曲げ重ね積みして置いた麻皮を置き、先ず腰掛けに座す。この時、右足は曲げ膝杖の上に置き、その足先きは腰掛け台の下に入れ、左足は立てて、精麻加工に取りかゝる。先ず麻皮を一手づゝ麻掻き台の上に麻皮の外部を上にて内部を下にして置き、右手に麻掻きを持ち、左手に麻皮の根の方を持ち、麻掻き台の上の板の上にて、麻掻にて表皮及び水分を磨撫せながら十センチぐらいづゝ左手にて引き出す。次第に長くなるため左足を倒し、左足首を動かして、この足の力にて精麻を挽き出す。終ると現在左手に持つている部分(根本の処)を持ち直し(これの持つ処を二の手という。)根の皮の表皮を前と同様に挽き出し、その左方に麻質の上質、中質、下質のものと三種類に區別して、何枚も重ねて置き、その日の予定分量の終りたる時に、竹竿に根本を上にして、六枚より八枚ぐらいを度



(31) 麻挽き一揃



(32) 最初(1の手)の挽き出し

として、上部一〇cmから一五cmぐらい余して結び、一掛けとして日かけ乾として五、六日乾す。



(写真 33、34)

二の手の麻挽き

(35)



(34)

(4) 麻結び

一旦挽き終つたものを竹筥に掛けて日かけ干しとする。この時に六枚から八枚を限度として、根の方を上にし、上部一〇ノ一五
余して結び、五、六日間日かけ干しして置き、この一結びを一掛けという。この一掛けを六、七個合せて一はすしとして合せ、



(35) 精麻の重ね置き作業



(36) 水に晒したおぼくそ

二の手の麻挽きの終つたものは上中下質ごと左方に重ねて置く。
麻挽き作業中表皮を麻掻き出したものを「麻ぼくそ」といい、これを水に晒し、晒したものを「おぼくそ」として処理する（紙の原料等になる）。



(37)

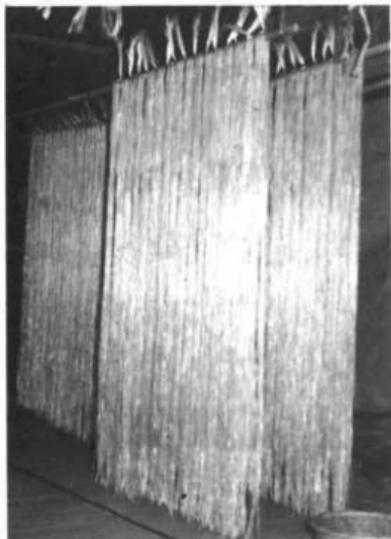


(38)

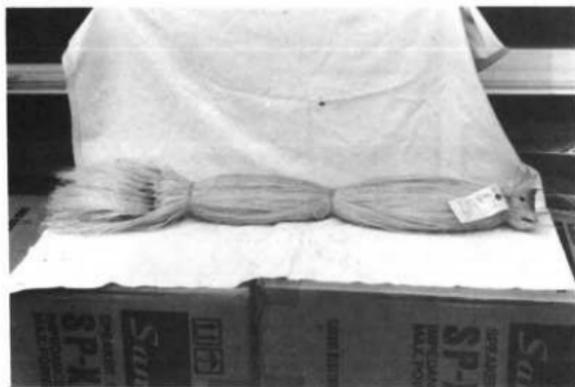
これを合せて一東二貫匁東(八キロ)として保存し、売ります。尚、これを一五キロ合せたものを一連という。

(写真 37・38)

精麻結び



(39) 精麻の日影干し(一掛けづゝ)

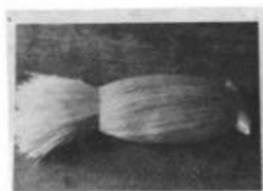


(40) 一掛けを七つ合せたもの

(写真 41・42)
精麻八キ口合せ九一連もの



(41) 一連作業



(42) 一連もの

(5) 出荷

精麻の出荷には、等級をつけて、写真43のような等級を
そえて出荷する。等級表は別記する。



(43)

(6) 採種

七月下旬より八月月上旬にかけて麻抜ぎの際に畑の周囲に
残して置いたものが、九月上旬に雄麻の開花をみる。雌麻
は開花せずして実を結ぶ。其の期に雄麻を取りのぞき、十
月下旬より、十一月月上旬にかけて麻種の収穫期に入り、鎌
にて麻の枝を刈り取り、縄にて縛り、物置等の軒下に垂し

乾燥する。充分に乾燥したものをムシロ類の物の上にて打ち
落し、実と糠とを磨箕(とりみ)にて吹き分けて、箱類に入
れて貯蔵する。

(写真 44)

九月頃の雄麻・雌麻



(44) 左・雌麻 右・雄麻

四、大麻栽培者免許証と誓約書

33 頁は個人情報が含まれるため

非公開

五、大麻生産の諸道具類

押切り鎌 生麻の長さをそろえて切る具

尺 棒 生麻の長さを定める尺棒

生麻本揃板 (写真47)

生麻を一束としたものを一定の長さに定め切るため、
この板の上にて本をそろえる。



(47)

麻切り鎌 (写真48)

生麻の根、葉を切り取る具。上部刀の部分少し反つて
いるのが特徴である。



(48)

板剛り具

(写真 49)

麻挽き台の上のせてある桧板の表面が精麻のために麻挽きにて数多く挽かれると、その表面が凹凸になる。その凹凸を剛る具。



(49)

膝 枕

(写真 50)

麻挽きの際に右足膝をのせる枕。これにて体を安定させる。

腰掛け台 (写真 50 右)

麻挽きの際この腰掛け台の上に身体をのせて安定させる。



(50)

麻挽き台 (写真 51 上)

剥取りした麻皮を精麻する時に用いるもの。台は栗。台の上の板は松木の正目の板をのせ、頭にサンを立てて精麻の内例をこれにてこす。

寸法

長	五四 cm
巾	六 cm
高さ	三五 cm
サンの高さ	二 cm



(51)

麻挽き (麻挽き剥刀) (写真 51 下)

麻挽き台の上に麻皮をのせ、その上をこの麻挽きにてこすり、麻皮の表皮を挽き取る具。

寸法

巾上部	一〇、五 cm
下部	九、五 cm
長さ	一〇 cm
材料	桐



(52)

半切り (写真 5 2) 播種前にこの半切りにて糞肥、人糞尿、米糠、蚕糞、酒粕、大豆粕等を混合させ麻の肥料を作る具。
寸法 (高さ 30 cm、直径 110 cm)

麻舟（写真 53）

干し上り生麻をネド入れ前にこの舟に水を入れ、生麻を浸すために用いる用具。



(53)



(54)

寸法

材	下	上	長
料	巾	巾	さ
			二二六
			六〇
杉	四六	六〇	六〇
	cm	cm	cm



(55)

ねど倉(写真55)
 生麻を水に浸し、乾燥し、又温度の変化を防ぐ。この中に三日程入れ、籾や麦殻など掛けて置く場所。厚い土壁にて作つてある。又、表殻等で周囲を囲つて作る家もある。



(56)

麻釜(写真56) 生麻を熱湯にて煮る具。
 だ円形の釜で、中に鉄釜があり、これに火をたき熱湯を作りこの中に生麻を入れて煮る(二、三分)。この写真のものは明治末期から昭和のもの。
 寸法(高さ一二八cm、上部 直径六四cm、下部 直径四八cm)

舟板(写真57) 生麻煮器

江戸時代、明治時代にこの舟板の上にて別に熱湯を作り、生麻をこの上にて熱湯を柄杓にてかけたもの。
長さ2m、巾四九cm、材料は栗。



(57)

六、害虫

麻虫

成長した生麻の根本地上三cmぐらいの高さの処に穴をあけ生麻の中にて地中の方に向つて住み、麻の汁を吸つて生活し、糞は白く、根元に固めて、穴の蓋として置く。頭は褐色、体は白く、約五cmぐらいの大きさに生長する。こどもはこの麻虫を焼いて食べた。カンの虫にきくといい。

(写真58) 生麻の根本に生活する麻虫の状況



(58)



(59) 根の中に居る麻虫



葉虫
(60)

葉虫

麻の葉裏に付き、葉を食し、麻が生長した七、八月頃に多く繁殖し、葉を穴だらけに網の如くにする。色は黒く、大きさは二mmぐらいの蝨に小さい虫で、製麻には影響は左いが麻の生長には多少の影響あると思われる。

麻づくりと商取引関係

一、麻の栽培

麻つくくり三大条件

「イチカラ ニネド サンヒキ」といい、もつとも大切なことは、よい生麻をつくる栽培技術の問題。次いで、どんなによい麻ができてネドに入れるのに失敗しては元も子もなくなつてしまふこと。さらに、ネドがうまくやれても精麻にする麻挽きの作業をおろそかにしては上等の麻はつくれないという意味である。

麻畑つくりに

(冬ウナイ)

麻畑は、十二月中に冬ウナイをする。肥料は入れず、畝で低いところへ土をおとしたあと、エンガでウナウで、今年の土は下に入り、七・八寸の深さにすきおこす。現在のテトラより深耕である。

(中ワリ)

二回目は、三月彼岸すぎ、畑の水がとけて土もやわらかになつたころ。冬ウナイと逆の向きにすきおこす。全面すきおこす。すき残しをつくと「障子ウネエ」といい、所々残すのを「ハシゴウネエ」といつて日備とりのやる仕事とされて悪口をいわれた。

(仕上げウナイ)

アラゴイ(堆肥)を入れ埋めこむ。反当り百貫から百五十貫ほどで、前作の作物によつて肥料分がらがうので、ヒエヤオカボあとはたくさん入れて、野菜などのあと地には肥料を入れるのを減らさないと麻がのびすぎて倒れる心配がある。麻は連作をしない。

(フチゴヤシ)

種まき一週間くらい前に(四月初ころ)、ヒトツカ(一畝強)に四荷ていどの下肥を、畑一面にまく。フタヒシヤクの下肥を

水で割つて薄めたくらいの濃さで、柄杓を肩に担ぐようにして一面にふりまくので、風の日はとてもできないしごとである。

(ならし)

種まきの前に、畑の凹凸をならしたり土の塊をつぶしたりする。カナクマデ(ヨツゴ)で畑を平らにするわけである。昔は、こりしたあと畝でもう一度平らにする作業をしたという。

(種まき)

麻のマキツケは、吉日をみて村中が同一の日にする。これは、鳥の害をうけやすいので一斉にやることによつて一戸当りの害を少なくする一平均にするという目的が一つであつた。

四月八日に、村中で農休みをしたあと寄合いの申し合わせできめた日に、いつせいにまきつけをした。だいたい四月九・一〇日ころになつた。

(播種量)

オタネはヒトツカ六合(一畝五合)を目当てとしてとつておく。風が吹く日にまくと余分にまきこんでしまうので余分にとつておく。三合くらいしかまかないと鳥(カワラヒワ)が拾つてしまう分もあつたりして麻のサタが適切れてしまう。

まく前に調整しなおしてからまく。

まき方

(フンギリ)

ブチゴヤシをしない時は、径五尺ほどのハンギリ(半切桶)の中に、コヤシとタネと水を一緒に入れて、よくといてまく。コヤシは堆肥、人糞尿、コヌカをませてふんで、コイ塚を積んでつくつておいたものを使う。水の不便なところにまくが、川が低く、水が少ないので一斉にまくときは、小さいセキでは水が不足して困つた。

フンギリはツマジリ桶に入れてツマじる。

種まきは人手がたくさん必要なので、近所や親類とエエでまくことが多い。水や肥料を運ぶ人、サタをきる人、種をまく人と

いりのでかなりの入手がいる。量は畑に教えられてやるので、ヒトツカで、ツマジリ桶七つか八つ、種は六合くらいを目標にした。現在は、もつと量を多くまく。種を細られることが多くなつたからで、麻はウルヌク分でも植えることは不可能である。

(バラマキ)

ブチゴヤシをした畑の場合に、こうしてまく。完熟堆肥を乾燥して、畝でたいたいて、さらに手でもんで、こまかくバラバラにしたものにアンモニア、コヌカ、豆カスなどを入れたものを肥料とする。

まき方は二通りになる。

マネで筋をつけ、そこにサクをきり、堆肥をまいてから種をまいて土をかけるが、畝をふるうようにして土をかけ、土をとつたところが次のサクになる。

人手のない時には、畑に合せて肥料の量をきめておき、畑にオガラを立てて印として範囲をきめ、一面に肥料をまいておきあとでサクをきつて種をまけばよい。現在はこゝの方法をとつている。

(サク巾)

畦間は、八寸ないし一尺ほどで、サクの深さは五分くらい、土をかけるのは種がかくれくらい、太陽が出てからまく。土が冷えていてはハエクチが悪い。だから「めし前仕事にいくつまいた」というようなのは、仕事は早くても突さいのハエクチはよくないので、かなり日が上つてからの方がよい。

(麻の手入れ)

種をまいて一週間ほどで発芽する。三寸(約九センチ)くらいになつたときに第一回の間引きをするが、抜きとつたものはサクの間に放つておくとチヨリンチヨリンに乾くので、そのころにオザクをきる。オザクヒキともいい、種をまく時に使つた細身の畝でサクのまん中をひいて、土を両側によせてやる程度のオザクをきる。

第二回の間引きは、五月の十日がらまりに季節風で麻が乱れるので、倒れたり、折れたりした麻を中心に間引きをする。徒長した麻も間引くが、これは麻のびぐあいをそろえてやる仕事である。中腰で仕事をするので、ひざを土の上についてやることができる。

大夕立があつたり、あらしがあつたりすると、曲がつたり、折れたりしたのはぬいて、伏しただけのはかこして三ノ四本まとめてしばつて立てる。昔は、かこしたのをアマナ（カンゾク）でしばつた。アマナはそのままで置いておいて、とかずにすむ。遅霜でやられることもある。早くのびて、ズイができたころになつて霜にやられるとよくない。

麻は、六月ころがもつともよくのびる。「竹の子より麻の方がよくのびる」。「ハゲンハンタケ」ということがあるが、オジヤクに合わせてみて、半分の高さで育つていると今年はいよといふ目安になる。

麻ができてくると全体に黄色みを持ち、下つ葉が黄ばんで来る。七月末ころになると、対生である麻の葉が、互生になつて来る。「キリハがのぼつた」という。こうなると麻をこぐ時期になつたとみてよく、七月末の土用ミツメさきごろこぐ時期になる。これから盆前にこぐが、おそくなるとカラがこわく（かたく）なつてよくない。

天気が定まつたところで麻こぎになる。

（麻の種）

麻をこぎとる時、麻畑の一方に三サタくらい刈り残して種とりをする。小さい麻はぬきとつて、大きくなってしつかりしたのを残すわけで、そのままにしておくと、やがて堆木が花をつけるので、花が咲かずに実をつける。霜が降るころ、ソバの刈り取りと一緒に上の方だけ切つて家に持ち帰り、ナワで編んで軒端につるして乾燥する。

半月ほどして乾燥した麻種（オタネ）は、庭にむしろを敷いた上にナワで編んだままのせて、クルリ棒でたたくて種をとる。葉はよく乾いているので粉のようになるので、唐箕（トウミ）であおつて仕上げをする。独特の強いにおいがするが、一・二日間、むしろでほしてから麻袋やその他の布袋に入れ、穀びつのようなものに納めて保存する。ビニール袋などに入れて密閉すると生えなくなることがある。またネズミの害にも注意するわけである。

（カカシ）

正月の山入りのとき、オジヤクというので大名様をヒトツカに一本づゝ（畑に一本づゝというのものもある）の割合で長いのをとつて来て、小正月のアーボヒーボと一緒に堆肥舎のところに立てておき、麻の種まきがすむと麻畑に持つて行つて立てる。長さ

七・八尺のもので、麻ののびかげんの目印になるもので、ハラミバシ、ケエカキ棒も一緒に立てる。ホダレも畑の入口に立てるが、十六ホダレは、麻の節が十六節だからというので十六ホダレというのだともいわれ、麻畑の中央に立てる。また、「鳥の口をふさぐ」といつて、オタネ（麻種）を火でいつて、紙に包んでオヒネリにして、カユカキ棒の割口にさして畑に立てた。

バをつくり、ソバの収穫後、秋麦をまく。翌年、麦を収穫するとアワ、ヒエ（麦の間に種まきをする）をつくる。こうした後、冬ウナイをして翌春再び麻をまくことになる。

(畝)

麻畑で種まきに使う畝は、一般の畝よりも少しせまい細身のものを使う。柄との角度は腰の高さに合わせるのがよい。

(オマキザクラ)

生原の観音堂のシダレザクラや根古屋の鍋次郎さん宅、第二小の桜などがオマキザクラといわれた。ナメ沢の桜の咲き出ところがオマキのシンといい、サクラの花びらをまきこむといいともいわれた。

(麻虫・オムシ)

麻の害虫としてよく知られているが、根を食う。収刈に影響するほどではないが、切りたおしてみると、下の方の部分に入っている。これを焼いて食べると、香ばしくてうまい子どものころは、麻をこくとおこられるので、塩水をつくり皆で穴の中に吹きこんでとつた。これを焼いて食うわけであ

(麻畑のサイクル)

麻は連作をしない。一年おきに栽培するようにするのでほぼ同じようなサイクルがある。麻をつくつたあとに秋ソ



(写真1 麻畑につくられたソバ)

る。とらないとウジが入つていて、麻の根元がふくれてコブになる。

(害鳥)

カワラヒワが一番悪いことをする。次いでスズメで、最近ではギヤアギヤア(ムクドリ)がふえた。ふだんはいるのかわかないのかわからないカワラヒワが、麻をまくと集まつてくる。ヨシキリは、麻につきものの鳥で、麻のたけがのびて来ると何本かをよせて巣をつくつたりした。直接の害はない鳥である。

二、麻こぎ、湯かけ

(麻こぎの時期)

麻の葉は対生だが生長して熟す頃になると葉がたがいちがいになつてくる。これをキリハ(互生)といい、こうになるとこいでもよい時期になつたという。

(三十日オヤ)

麻こぎ作業が始まるときには、畑が遠い人は、「三十日オヤ」という獨立小屋をつくつて作業する。ジフクをつけた本格的なオヤ(小屋)をつくる家もあるが、多くは獨立して柱を立てて、オガラで屋根をふいた程度のもので、ゆでた麻をほしたり、しまつたりの作業がすむまで利用する。

最近ではトタンナマコで屋根をふいたりしていた。

(麻こぎ)

麻こぎは、全部を一度にこぐのではなく、なれた者がタズモノを先にとつて、あとからホンソをこぐ。麻は四段階くらいに分ける。

(コキン)

長さは三・四尺(約九〇センチ—一二〇センチ)目から下ぐらいの細くて小さい麻。ぬきとりながら葉をこいてしまうのでコ

キノという。これは折れてもかまわない。麻をしぼるのに使う。

(写真2 屋根裏にあるコキノ)



(シタン)
葉までは六尺ほどの長さがあるものだが、細くて、や
わらかなものをシタンとして別にこぎとる。

見分けたり、折れないようにこぎとるので慣れている

人がやらなければならぬ。

(ニカイソ)

ホンソと長さは同じでも、ホンソよりもシタン木で、ミイ
リの悪いものはニカイソとして別にする。

(ボウタ)

特別に太いものはボウタといい、皮が厚くて、ネドに入れ
ても同じにはネズ、麻挽きをするにも困るので運び出してま
とめる。まわりになかつたり、畑のキワ(縁に近いところ)
で育つたものの中には、つえに使えようない太いものができ
る。

(ホンソ)

中心になる麻で、長さは麻尺に合わせて切つてそろえる。

(麻切り鎌)

両刃で、柄が短く、相当に重い特製のものを使う。刃が反
つているので、麻へのあたりがよく、切り易くつくられてい
る。麻をにぎり、先ず根を切つてから、麻をまわして向きを
変え、葉を払うように切る。

ホンソの長いのは切るが、短いのは葉をおとしてから長さ
をはかつて切る。そのとき、刃が急になつていければ麻ガラに

傷をつけるので反らせる。また、麻の間にある葉も落とすので、両刃につくつてあれば麻を傷つけずに葉も落せる。麻が折れてしまふとそれから先の仕事にぐあいが悪いので、こぎながらも注意が必要である。

(尺 棒)

畑用の尺棒は、竹または篠竹を使い、元を尖らせ、下の方に穴をあけて棒をさしてつくり、これに長さの印をつけて、麻の根元の方にひっかけようにして尺をみて(長さをはかつて)切る。

二階用(屋内作業用)の尺棒は、畑に立てることもないので元を尖らせることもなく、その分だけ短い。

(生 麻)

押し切りで長さをそろえたところで切つた生麻は、立てておき、乾燥させないようにする。ひつついては(ふかす前に乾いては)困る。コキノで束ねたのがたまと、木の下やネドの中に入れ、ムシロをかけたりにして陽があたらないようにする。陽が当たると、半日もしないうちに赤くなつてしまふ。こうなるとオボツクソが麻にくつついてしまふ。

(麻の根、葉)

根は生でもどんだん燃える。麻には油分が強いので手がまづくろになつたりするが、畑に積んでおいて燃してしまふ。葉は大麻タバコに利用される心配があるため、燃してしまふと指導されているが、畑の隅に積んでおけばたちまちのうちにくさつてしまふ。

(湯かけ)

昔、麻煮釜のできる前は、湯かけをした。大釜を据えつけて湯をわかし、大きな木のトヨをかけて、その上に麻をのせ、煮え湯を柄杓でくんで麻にかけた。湯はトヨを伝わつて大釜の中へ返つて来るようにした。

(ふかし)

明治のころになると、四角のドウ(フカシドウ)を大釜の上にのせ、生麻を一度に八束くらい入れてふかした。生産量が多くなつてからのことといふ、ふかしのすき間から湯気がパツパツと出るようになれば麻がふけたことになつた。

(麻煮釜)

野洲(現・栃木県)あたりから仕入れて来たという。

麻煮釜は、昔は鉄砲釜—下に金の網があり、下には水がためてあつたので、灰は下へ落ちて消えた。

その後、横口の釜になつた。湯がぐらぐら煮えた中へ麻束を入れていていねいにゆでてやる。時間にして二分くらいの短い間の作業が続けられる。

(麻煮)

麻煮は、丸くしばつた麻の束を、ぐらぐら煮えた湯の中に入れて、ていねいにゆでる。二分くらいで逆さにしてウラの方も煮る。うでながら水の加減をみて操作する。また、手にはワラゾウリをはめてやるのがよい。さもないと熱い湯の中に入れられた麻の熱で手がやけどしてしまう。

火を燃したり、水をたしたり麻をゆでたり、いそがしい作業である。

(乾燥)

ゆでた麻は、おかみさんが運んですぐにはす。いい天気が続いているれば一週間ほど、上等の麻には十二日ということがあがる乾燥しきるところには、麻の胴がツルツルになる。雨にあててはだめ、夜露、朝露にあてもいけない。

乾燥しきれないうちに長雨などで天気が悪いと三日目ごろには、くさがりが入つてねばつたり、カビが出たりするので、すぐに湯に入れる。天気が回復しなければ毎日のように湯に入れるが、何度も入れると黄色みがなくなり白っぽくなつて艶がなくなりその年の麻の仕上がりは悪い。また、麻が黒くなつたのは最低で仕上がりがよくないばかりでなく、糸にヒキがなく、ブスンプスン切れるようになる。

麻をほすときは、最初はタカボシで、乾燥してくるにつれてしばつたところを下の方に下げようにしてほす。

(アゲ湯)

二番湯ともいい、最初のような煮るのちがつて「カビ止め」に短時間入れることになる。熱湯の中に入れ、ボクボクというところを上げる。

これは一日でほし上げるので、天気の良い日には夕方早く上げて（西の方に陽がまわつたらすぐ上げる）しましう。こうすればカビが出ることはない。雨にあたることもう一度湯に入れなおす。

三、ネド入れ

（仕事の分想）

ネド番と麻ハギは女の仕事で、麻挽きと荷づくりは男の仕事になつてゐる。ネド番と挽き手は仲が悪い。ネドでネスギルとズタのようになり、麻がヘチマのようなくあいにくついでしましうので、こまかくさけない。またネドのやり直しは麻の質が落ちる。

（準備）

夏の日、湯かけをして天日乾燥した麻は二階に上げて保存しておくので、九月になると、ネド入れの準備が始まる。保存してゐる麻は、切り口が黒くなつてゐるので品が悪くなるので、ウラ（先遣）の方を切つて仕上がりをよくするわけだが元の方は麻挽きの時にヒグになり、切らずにすむので切らない。作業は押し切りでやる。この時、六把一束でまとめてあるので、これを四束にしばり直しをする。上下をしばつてつくり直しをするときには、色の赤いや、キズのあるのは選別をして品質がそろふようにする。

（ネド入れ）

麻をオブネの水の中にザツと入れ、それを上げてオブネに立てて水をきり、更に竹竿に立てかけておき、この間に前に上げたものをネドの中に持つて行つて入れて来て、次のものを浸してゐるうちに立てておいたものがちよつとよくなる。

竹竿はマクラといい、杭を打つてそれにかかけ、水が元の方に流れて行くようにして、ウラの方が早くネテしまわぬようにする。

ネドの下には大麦わらを敷く、小麦わらでは熱が出ない。大麦わらでは水もこける。この上にむしろを敷いてネセルが、大麦わらの上に直接のせる人もゐる。しかし、こうすると麦わらがくつつかつてしまつたり、青い麦わらなどを使つると麦の色が麻に染

まつてしまうこともあるので、むしろは敷く方がよい。

麻がネスギそうな時は、ネドの中に立てておくとよい、外に出しておくこともある。
ネドに入れておいてデキゴトがあると困る。不幸なことで手伝いに行かねばならない時などは、ネドに入れておいたものを二階に上げてひろげてほしておいたりする。そうしておけば、水にもどすと皮をむいて挽くことができるが、すんなりとはいかず、麻のせいをくさらせないことだけなので、どうしても格落ちになるのはしかたがない。

(写真 3 麻を入れかえる)



(アラネド)

その年、最初にネセルものをアラネドという。アラネドは、細菌の関係らしいが、どうしてもネドガタとよば

れる蛇のウロコのような黒い斑点や赤い斑点が入つて、ヤマカガシのようになつてしまふ。ところがこれは最初するときだけで二回目からは出ない。そこで他家でやつている時は、オボクソをもらつて来て麻舟の中の水にといてやつたり、コキソをやつたりしてからはじめた。

(時期)

ネドの好期は、秋の彼岸前、九月中旬ころで、このころならば二晩でネルのでもつともよい。それより前だと気温が高すぎてひと晩でネてしまふ。それはかりでなく、皮をはいで麻を挽きながらもネてしまうのでよくない。

ネドは、陽気によつてちがうので、九月中旬から下旬ころは一日二回、十月末から十一月までやるときには一日一回だけになる。寒くなつてよくネなくなると、むしろを余分にかけてやつたり、本当に寒いときには火鉢やストーブを入れることもある。ふつうにやつていて秋のお祭り時分までだが、仕事が多

くいていそがしいころは、エビス講の時までやゝていて、十二月近くなつてコンロを入れたことも何回かある。
ネドの温度は何度というよりも女衆の仕事のカンが大切で、カンの良否が麻の仕上がりにひびいてくる。

(麻舟の水)

ネド入れに使う麻舟の水は、一日おきくらいにとりかえるが、水のにごりをとるわけで一度に全部とりかえてはいけぬ。麻のネドあいをみながらとりかえたり、加えたりして加減する。これも爾氣に大きく左右されることである。

(麻のネド番)

麻を干し上げてネドへねかせるのは女衆の仕事、麻をならべて、麦わらをちらして、水をかける。風の入らないようにする。ネド番の仕事は女衆の仕事で、これが上手にできないといひ麻ができない。麻をねせすぎるとハツコウが多くなつて麻がうまくなげない。ねせる温度は勅にたよる。手加減による。水をかけるのは一日に何回か、水加減をする。

線をもらうとき、あすこんちはいい麻ができるといひ「あすこんちの娘ならいいだろう」といわれる。

組内に出来ごとがあれば、麻のネド番も、つきあひも、両方しなければならなかつたので大変だつた。そんなときは、麻をネドから出して水をかけておいた。

ネド番は、八月末から十一月なかばころまでの仕事、ふつうは十月一杯で終えて、そのあとは麦まきの仕事にかかると。

(富沢瀬市・談)

(麻ハギ)

ネドのすんだものは、庭先や納屋の中で麻ハギをする。麻の太さによつて本数がちがうが太いので三本、細いのは五本くらいをそろえ、根元の方を持つて下に回けて折ると上の方の皮が、上に向けて折ると上の皮がむけるようになるので、そろえてはい、麻の表と裏がよじれないように注意してはく。長いのではしておけないので、タソツカワ(表皮)が下になるようにして丸く輪になるようにして重ねてゆく。

一日に六把くらいが仕事量になる。これはネドに入れる前に一束を四把につくりかえているので、ちようど乾燥したときの一束半の量である。

はぐとき、温度の高い所においてむいても麻がネセスギルこともあるので注意が必要だが、こわい（ネセタリナイ）時には日向においてビニールでもかけておけばやわらかくなる。

ネドに入れる量は、麻ハギと、麻挽きのできる量をみて毎日きまつた分量づゝやるようにする。

麻ハギをした麻は、すぐに麻挽きをしてもよいが、作業の都合もあるので、竹竿にかけておくこともある。長くおくと水が切れて乾いてくるので、そんなときは麻挽きをする前に少し水をかけてからやる必要がある。

（麻ハギの話）

麻つくりをさかんにやっているところのこと、あるところに旅人が来て一夜の宿をとつた。夜中に目をさますと、老夫婦の小声で話すことが聞こえて来た。耳をすますと「今晚はよく寝たから、寝たらハグベエヤ」という話だつた。旅人はおどろいて「寝こんでしまつたらハガレル」ということだから「これは困つた、明日までいたらどうなるかわからない」というので、夜中に荷物をまとめて逃げ出してしまつた。朝になつても起きて来ないので不思議に思つた宿の人が行つて見たら、旅人の姿はもうなかつた、という話がある。

麻ひきが始まりネド入れをして、そろそろ麻ハギ、麻ひきをするころの会話がひきおこした笑話である。

四、麻 挽 き

（麻ヒキ）

皮をはいだ麻は、すぐに挽く方がよい。ひと晩おいておくと色が落ちる。皮の色が麻のせんに染みこんで、くもつた色になる。すぐにひくと光沢がよく、仕上りがよい。

昼間の明るいところで麻挽き作業をするとキズもわかるが、夜やるときは、どれもよく見えて（ランプの下でやつたこともあるが）翌朝になるとがっかりするようないことがあつた。戦争中は空襲警報が鳴ると電気を消さねばならず、作業がおくれた。

精麻は、カワツオ（皮麻）の半分の日方になる。唐摺の麻は歩どまりがよかつた。矢倉の麻は減りがよく、したがつて皮麻で出荷するのがよけいに多かつた。

(麻カキ)

麻をもつてきて、麻ひき台の上にのせるが、そのときに麻が重なりあつたまままで始めると、最後まで重なつてしまうので、その時がかんじんで、次には「二ノ手」といつて、折り返して挽くときにも重なりたがるので、そのときにも十分注意することが必要とされる。

• 挽き始め

はいだ麻を挽き始める時には、全体に水を浸し、元の方は力いっぱいほつて、あとは水をこいてたやすくほらげらる。つるしておけば自然に水がたれる。

挽く時には、束は裏返しになる。

• カツタテ

一番初めひとかきをカツタテといい、注意ぶかく挽く。

• オオブシ

挽いていつてスネがかかるところのこと。

• シリ

麻のウラの方のこと

• フリダシ

挽いて行つてウラの方までやつてから手元の方に残る麻の元の方をするために返すことをフリダシという。ちよろどカツタテのところは二度目の挽き始めになるので二ノテになる。また、ふり出して持ちかえるので二ノテという意味もある。

• ヒゲ

二ノテで挽く元の方はヒゲとよび、これは通称オガシラ（麻頭）とよんでいるカアソがとれる。げたの鼻緒くらいになるもので、これ専門の仲買人がいたりして買いに来る人がいた。

• 能率

一日挽いて二束というのが平均よりも腕がよい。麻束四把で一束だから、二束八把ということで、これは最高に近い。現在は一束半くらいである。

(麻ホシ)

麻挽きをした麻は、四枚と四枚の八枚で竿にかけ下の方に立つた四枚をよじつて裏返しにしてから元の方で結び、結び目を下にして返すと、ちようどどちらも表が出るようになり、かけるときにもぐあいがいよい。これがヒトカケである。

(乾 燥)

挽いた精麻は、二階につるした竹竿にかけ、適当な量でまとめて並べて乾燥した。天気の良いときは一昼夜くらいつるしてかけばよく乾いたという。

(結 束)

特に数はきまつていないが、これまでの例では、七カケずつでひとつにしぱり、これを五つまとめてヒトシバリにした。こうしたものをまとめて三貫五〇〇匁(約一三キロ)で一俵とした。

(品 質)

長いのは、ホンソまたはナガソ、短いのはシタソ、タンジヤクモンという。

精麻にして三尺のものを受け付ける。それより短いものは、どんなによくてもシタソである。シタソなどになるのはシタソ木で、上の方のびた木にじやまされて伸びられず、力がなく、色も悪いものである。

(挽いた麻)

挽いた麻は、フタツ分くらいで元の方を結んだりしたが、こうすると気分転換になり後の仕事も楽になる。まとめるにも楽だが、竿にかけてから結ぶのに時間がかからない。

一日中挽いたものを重ねてゆき、結ばずにかわかして出荷した人もいたが、この人の麻は始末に困つた。

(精麻の乾燥)

挽いた麻は、二階につるした竹竿にかけてほすが、二日もすればきれいに乾く。雨が降れば外せないが、外へ出して乾燥することは長いもので取扱いがかんたんでなく、ぬれているのをたたむこともできないので二階で乾燥させる。

ヒトカケ四枚ずつで八枚を合せて結び（そそりな人は五枚ずつ、三枚ずつの人もいた）乾くと、七カケで一把とし、ひじまでの長さでしばつて外す。

（俵づくり）

束にした麻を全体で二貫匁（約七、五キロ）になるようにして、これを五つに分けて大きな束にする。しばるにも、その中から出して同じ麻でしはると等級にもよい。別の悪い麻でしはるとその等級になつてしまうことが多い。中にはアノコを入れるといつて悪いのを中に入れた者もいたが、商人の方が知つていて、かえつて損をした。

昔は、三貫五百匁で一連という。一俵は十四貫（四連）でまとめた。ホンレンニオルといつて、ていねいに麻を折つてまとめてレン（連）にした。これを葦座紙で巻いて、むしろで俵装をするが、俵づくりは、カケヤでたいたいてシヤチでしめてやり、サシダワラにあたる場所は針でぬつて仕上げたものである。

レンは一束二貫匁の方が買うにもよく、何束かよせて集めるよりもよい。

五、麻の格付と取引き

（麻の格付）

栃木麻が標準になつていたので、特等、一等、二等、三等と等外、の五等級であつたが特等の中でも上のものが栃木にないのを検査では ㊀ がつくが、 ㊁ の中でも金、銀、銅、甲・乙の等級をつけて区別した。印がないことなので、こちらだけできめて印も農協でつくつてつけた。本当のことをいえば、吾妻麻はよすぎて格付けにならなかつた。

（標準麻）

等級をきめるために、各地の麻を出して全国で標準をきめて、それに合わせて格付けをした。依頼されて標準品を出すと、代金は市場取引価格の二割増くらいの額が来た。

吾妻錦は麻組合の等級である。

(等)

麻は挽きながら等級の良否がわかつた。

農協の検査のころは十等級あつたが、統制のころは、上等、中等、下等の三つで、それ以上のは特だつた。麻は、挽く人によつてそれぞれクセがあるので、名札をみなくも、どこの家のもかがわかつたくらいである。

格付けは、①にひかり(光沢)で、②はりキ(力)といい強さで、細くさいてひつばつて切つてみた。

麻は、モトからウラまで通つている(せんいが重なつていない)のが上等で、下手の人のものは重なるからウラまでトウラナイので糸につくり難く、織物にするのにカセキならぬのが出たという。

色は赤いのはいやがり、薄黄色に光るのがよいとされた。

(県営検査)

麻は戦前に統制になり、県営検査が行われた。戦後は、県の委嘱で麻の指導員がきまり県下の麻の伝統のある地域をまわつて麻の栽培から麻挽きまで、泊りこみで指導して歩いた。

郡農会が主催して、各農業会をまわつてやつたが、泊りこみで麻挽きを習いに来たこともある。

(取引先)

北国屋が大正・昭和時代を通じて取引きしていた主な地域は、栃木・石川・富山の三県を含む一府十八県、七十六になる。そのうちでも、栃木十四、石川県十三、富山県十一で全体の五十歩にあたる。これを業種別にみるとおおよその分類で、麻布業者三十二、麻問屋十七、漁具・船具九・麻糸・畳糸七、弓絃四、等になつており、麻紋張業者は二となつていた。

(吾妻麻取扱の間屋・仲買人)

吾妻麻組合が昭和四年に発行した「吾妻麻一班」の十頁に記されたものによれば、

間屋は、岩島村大字三島 小池 為重郎

湯浅 富太郎

湯浅 安太郎

岩島村大字三島 丸橋 丑太郎

岩下 西山 梯輔

〃 西山 三治郎

の六名が指名されている。

仲買人については、同村岩下 富沢与平 外、計八名の氏名が上げられているが、すべて岩島村内の者である。

北国屋 西山三次郎氏メモ

小生三次郎襲名九代目にて、麻取引の關係もあつて襲名した。四・五代目頃より各地から商人滞在して用途に適した品を選び買入れた。長い人は一ヶ月以上も滞在、荷造し、一俵十貫五百匁（一連三貫五百匁三本）程度にして、一駄（四十貫）を馬の背で鳥井峠を越えて行つた。だんだん発達し、馬車（運送車）にて原町①・②等の運送店經由にて各地に運ばれた。

当家北国屋三次郎代々名主にて、使用人に案内をさせ、買付、問屋業としてやつていた。北陸方面からの客多く、北国屋と号したといわれるが、荷造はコモに包んだ。

三原麻等は、長いままトラックで栃木へ五・六台で運んだこともあつた。軍需品として営業停止となり、また、戦後少々取引あつたが、産額も減少して商売にもならず、だんだん廃業となる。本年（五十一年）は、岩島地区三八とか、それも先ない状態。

格付は、吾妻錦、黄金上、黄金、満月、山吹、黄鳥、紅葉、等外の八に分類し、その他に皮麻がある。

麻刈取時に、本尺、中尺、短尺と區別して刈とり、この中尺、短尺品は越後方面に喜ばれ、越後上布となつた。

上下尺品の内、吾妻錦、黄金上は弓弦、または漁具（セキヤマ）等を使用。黄金、満月は上布または一般上布、蚊強等。漁網はヤヤ上物。山吹、黄鳥は貴糸、上ロープ。紅葉等はロープ、しん縄等。

吾妻錦、黄金上は、三島、唐福等、これは地味と技術により生産され、岩島一般地区は満月以下、中には黄金級も少々生産された。

産額は、

一駄四十貫、岩島地区二百駄、八千貫位。

岩島の外、下等物にて原町、川戸、平沢、坂上、大柏木、長野原、与喜屋、貝瀬、林、川原畑から二百駄、計四百駄位。(長野地区)は三原麻と称し、木の皮のよいなもの。下駄芯繩)

このうち二百駄位は取扱つたこともあつた。三原麻は栃木県へ出荷、芯繩となつた。等級をつける標準

発育・地味がよく、生育が適当で、刈り取り期の管理よく、はつこり度良く、日数をあまりかけないで柄からはぐ。

加工 技術に上下あり、先ず光沢を出し、サケが良く(くまつているとサケない)、やわらかみと、かたさが難しい。水分が技術によつて抜けない。また抜けすぎない。

先ず麻は、力とサケ、光沢 できまる。

(岩下 西山三次郎・談)

岩島仲立同業組合

吾妻町岩下 西山弘太郎氏方の明治四十一年に岩島仲立同業組合が配つた口残値上げ口上書が残っている。

岩島仲立同業組合

各位益御清榮奉賀候 降テ本組合義各位ノ御愛顧ニヨリ年々盛大ニ趣キ候段深ク奉謝候 本年モ一層勉勵親切ニ仕候間御引立願上候、然ル処当令諸物価騰貴ニ付同業者一同協議ノ上右ノ通り直(値)上仕候間不愚御承知ノ上沢山御出荷被下度右御注意迄ニ申上候以上

一 口 銭 原価百分ノ式

一 荷造費 老狀ニ付大三個迄金老円

中入四個造老円二銭

一 小荷駄 老狀ニ付金參拾貳銭

米 薪 之 部

一 兩口銭 原価百分ノ一

一 米口銭 原価貳百分ノ一

以 上

右之通りニ候也

仕 入 れ に 来 た 商 人

仕入れに來た者は、三カ月くらいの間當地に泊りこんで仕入れをした。問屋商人の家へ泊りこんで、毎日弁当を持って出たが仲買人は北国屋出入りの者をつけ、ソロバンやハカリを持たせて知り合いの生産者宅を訪問しては買いつけをした。長い滞在だから、近所へ風呂もらいにまわつたりしてつきあひも広くなるので大ぜいの人と知り合ひになり、暮しの強い人が來た時などは、昼間から大ぜいの人を集めて暮をやつていたこともあつた。

自分でみっちり仕事をしている人は、泊りこんで買を入れて歩いたので、麻は北国屋が集めて、荷造りして発送した。問屋はこの集荷手数料や口銭・荷造料をもらつたりした。買いつけ人の宿泊は、ほとんど問屋ですませるが、まかないについてのみまりは特になく、請求はしないが、そのまま帰る人もいれば、いくらか払つて行く人もあつた。

(岩下 北国屋 西山三次郎氏・談)

(統制)

昭和十四年、麻が統制になり、県の係の小村某技師が、県内産の産を一人で扱って、当時の金で百万円とかいう大金をもうけて預金したとかいう話がある。同じ県の役人の口からも、ずるいことをしたという話が出た。

(買ひ集め)

大正時代が一番生産が多かつた。よい商売で、買ひとり代金は先方から現金が送られて来るのだから、これをもとにして買ひつけをした。二買、三買というように買ひ集めて、家中が集めた麻でいつばいになり、ようやくその間で寝たこともある。これをまとめて出荷した。

良い麻は四連で一俵とし、ふつうの麻は三連で一俵とした。シヤチでしめて俵にして出荷した。

十月から十一月が最も多く、強い人はその時期には売らずに持つていて、三月・四月になつて売つた。土蔵の二階などにかいて、ネズミにやられないようにしておけば相当長く保存することができた。

まとめて俵にされた麻は、特別契約の馬方が二、三人いて、馬の背で運んだ。

(三島 湯浅栄太郎氏・談)

(買ひつけ)

買ひに行く時は現金買ひである。信用のある人は、金を払わずとも持つて行つてくれというので品物をもらつて来て、後で一度に支払つた。

厚田のタマキ屋は八十買も出すので「オイベス購に勘定に来てくれ」というので、その(エビス購)日に支払いに行くとオイベス様に供えた酒をもらつて飲んだものだつた。大正八年には、千円の束を支払つたもので、だから一度にもつて来てといつた百円札なども麻買ひでもなければ持つて行かなかつた。

五月・六月には、麻をつくる農家で金がなくなるので、先に金を融通しておいた。先払いである。その時期になると、大柏木の方の人が来たもので、「あの人が来たから金借りに来たんさんべえ」といつてまわりで見ているものだつたという。

(三島 湯浅栄太郎氏・談)

(相場)

九月十五日は八幡さまのお祭りで、この日になると能登(羽咋)の服部さんが来て買い付けを始めた。八幡さまのお祭りでの年の相場がきまつたという話がある。

最初は下麻(シタソ)をひくので、これから出荷した。

(三島 湯浅栄太郎氏・談)

(現在の取引先)

昭和五十一年の現在も買い継ぎをする。取引先は奈良の岡井麻布商店(奈良市中之庄町)で、ここでは茶布を生産する日本唯一の工場をもち、他に例がないのでやめられないという。岡井商店では、ふつうは野洲産の麻を使っているが、吾妻麻の方が品質がよく、使いたいので、精麻があればぜひ手に入れないということである。

(三島 湯浅栄太郎氏・談)

昭和10年代麻相場

一連(3貫500匁)単位

最上	吾妻錦	70	～	80	円
黄	金上	50	～	60	
黄	金	40	～	50	
滴	月	30	～	40	
山	吹	25	～	30	
黄	鳥	20	～	25	
紅	葉	15	～	20	
三原	麻	00	～	15	

(等外)

注1 相場の変動があり、また仕入向によつても多少の相異あり

注2 滴月の中にも力がありサケも良く上麻布になる品もあり

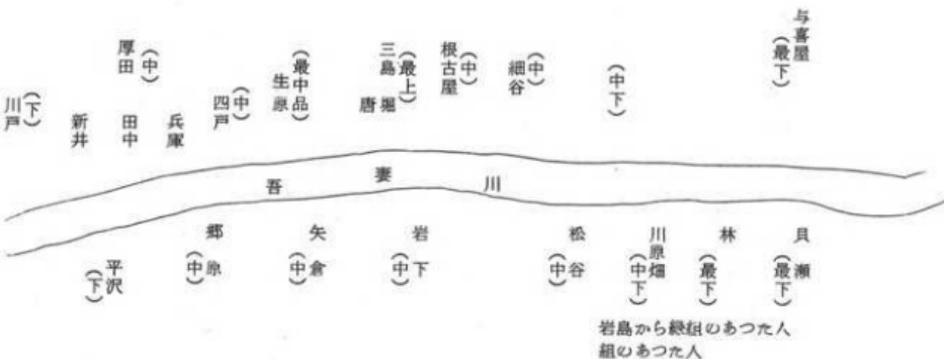
注3 このころ最上等品の吾妻錦を一連百円で買ったところ「吾妻麻に一連百円の取引があつた」と新聞に出たことがある
そのときの用途は弓弦用であつた。

(北国屋 西山三次郎氏稿)

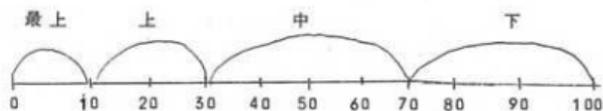
<表2>

大柏木 中下

岩島から繰組のあつた人



岩島地区格付別生産割合



(北国屋 西山三次郎氏稿)

六、皮麻、副産物

(ウラン)

畑で麻をこいだとき、長さをきめて押し切りで切つたウラ（先端）の部分からとつた麻がウランで、長さも一、二尺程度の短いものであるが、これも乾燥してカワソにする。

(オガシラ)

精麻にするとき、元の方をひくのは、はじめに持つていた方が最後になるので、根元の方の太いところが一尺くらい切れて残ることがある。これをとつておくとオガシラ（麻頭？）という名で売れた。

(サラシ)

麻を水の中につけておいてから挽いたものをサラシといつたというが、昔のことで最近はやつたことはない。

(生ゴシ)

湯かけをしないで生麻を乾燥させてしまつて（アオサという）、はぐときには川の水などに浸してからとる。カアソ（皮麻）をとるやり方である。

(オタネガラ)

オタネ（麻の種）をとつたあとの麻は、刈りとつて生干しをしてから、川に浸してカワソをとつた。ロツブの原料くらいにはなつた。

(オガラハギ)

麻ハギをしたオガラには、むけないうで残つた麻がある。これをていねいにとつてオガラハギの名で出荷した。等外だが皮麻の部で扱つたもので、ロツブにするには使はずらいが、下駄の鼻緒には強くて良いとされた。

(皮麻)

挽かずに出荷するものが皮麻で、皮がついているから色で格付けをする。

上等品は薄紫色なので、ムラサキ、その下が一、二、三等に格付けされ、等級が下がるほど黒っぽく、ホシも出た。長さもちがつていた。

カワソをむくには、麻束を川に浸しておいてしばらくするとむけるようになるので、水から引き上げてむき、竿にかけて乾燥すればそのまま出荷できた。

いい等級にするには、根元に近い方を切り上げるとよいので、畑でこきとつたときに相当上の方まで切っておけば、上等品とすることができた。カワソ専門の人もいた。

カワソをつくる時、吾妻川に浸してやつたのでは色が悪くなつてまつたくだめだが、山から流れ出す沢水ならばよかつた。

(虫害)

カワソは虫がくわないが、ネドに入れてとつた麻は虫がつく。そのまましまつておくと虫にくわれてブスンブスン切れてしまふ。一度使つてからしまえば虫につかれないという。

(オボツクソ)

麻を挽いたときに出るカスをオボツクソ、麻アカという。

オボツクソは、よく水にさらしてから糊でたたくと麻のせんいだけが残つて、よくかたまり、白くあがつてきれいななる。子どもがセキ(用水)に行つてたたく水ワルサのいい材料になつた。これをぞうきんにするとよい光沢が出たので学校生徒が学校へ持つて行つたりしたものである。

よくさらしたものは、建築の白壁用のツタにもしたが、麻組合を通じてまとめて出荷することもあつた。これは、専売公社に出荷され、タバコの紙の原料になるといつていたが麻は火着きがよいので使うのだといわれていた。

(オガラ屋根)

萱屋根の代りにオガラで屋根を全部ふいたことがある。萱よりは若干おとるが、何年分かのオガラをためておけばできた。村中のささでふき上げた。当時は、一軒で二反歩くらいは麻をつくつていたのでかなりのオガラがあつた。

(屋根の下地)

草ぶき屋根の下地にはオガラを大量に使つた。古くはお寺の屋根にも使つたというが、今年のは、大道(中之条町)の富沢家の住宅の復元に全部使われた。

(垣根)

オガラを垣根のスガキにするときれいに見える。

(日おかし)

オガラをヨシズのスダレのように編んで日おかしにする。

(霜除け)

オガラを使つてホウレン草などの青もの野菜のおかしにするといふ。

(オガラのマブシ)

イカダマブシにオガラを使つた。シラハギとまぜて三尺×六尺の大きさに、ひもでしばつてマブシとした。あまりさかんに使われなかつた。

(子どものオモチヤ)

子どもたちの遊びの中で、オガラがさかんに使われた。水車、風車、キネなどがつくられ、シシオドシ、ウサギツチリなどもつくつて遊んだ。自分でつくれない小さい子には親などがつくつてくれた。

(ツケギ)

オガラを使つてツケギをつくつていたこともある。オガラは火早いのでよかつた。

(カイロ灰)

岩下にカイロ灰をつくる工場があり、片貝文次郎という人が長くやつていて、東京にも出張所をもつていた。「吾妻太灰」と

いう名前で作っていた。

(葬式のつくりもの)

葬式するとき、オガラでダイヤモンドや弓矢の矢をつくる。

(盆の迎え火)

オガラを富山の方へ出荷したが、盆の迎え火に使うためといわれた。東京でも迎え火にオガラを使うのを見たことがある。

(盆のシメナワ)

麻をこぐときに、一番先に短いものをこぐが、これをコキノといい、多くはホンソをしぼるのに使うが、残りは、湯を通さず
に乾燥してとつておき、盆のとき、シメナワにした。チガヤ(茅葺)の代りに使うのを家例とした。

(ソバ)

麻畑のあとには一部葉大根をつくるほかはほとんど全部にソバをつくつた。麻の根を燃した灰をふるくらしいの肥料で、無肥料
でもいいというが、八月十日ころ種をまき、秋には収かくできる。ヒトツカで二斗、五畝で二俵とれたこともあり、ふつうで一
斗五升はとれた。ソバは「ヒキツケエシにある」というくらいで、カラソバ一斗で粉一斗がとれる。もちろんいいねいに挽くと
まつしろになつて粉は少ないが、粗く挽くと量が出る。クルマヤで挽いてもらつた粉はソバツカキにしてまづいが、それはこま
かに挽くからといい、自分の家で石うすで挽いた粉は粗いので、ソバの味が生きるのだという。

(ソバ枕)

麻組合でソバ製粉をした。昭和初年には、石油発動機を買い入れてやつた。そのころ(昭和五、六年ころ)上毛名産の中に岩
島麻が入つたが、次点くらいにソバも入つていた。麻あとにはソバをまいてつくつたから、吾妻名産になつたわけである。

七、雑

(ムラサキツツオ)

クロダネをまくと、生えて二・三寸くらいは木の色が紫色で、それからは青くなるが、まれにはこぎとる時まで同じ色のものが残ることがある。これがムラサキツツオといわれるもので、これはお諏訪さまに進げた。草津のこちらの方にある社で、八月二十七日がお祭りで、四・五本を長いまま束ねて、皮つきのまま持つて行つて上げた。毎年行くわけでなく、有志の人が行つたものだつた。

(麻の神)

特別に麻の神さまということはいわれないが、芝塚に、麻をまく時に拝むカケジクがある。また、九月十四日の八幡さまのお祭りに、初穂として精麻を奉納する。八幡さまは、鳥頭神社の境内にある小祠である。

(オマキ祝)

麻の種まきがすむと、オマキ祝いとして米のめしをた。本当は「オカイを食うぐらい疲れるから」というので、オカイをたくのがよいということだが、家にあるもので間に合わせて食べた。魚ヤトウフは上等のことだつた。

(オヒキアゲ)

麻挽きが終るとオヒキアゲの祝いをする。テアレエ酒という甘酒をつくつて、でかい鍋にいっぱい甘酒を近所中をよんでふるまう。

オヒキアゲは夜やるもので、仏さまへ進せてからふるまつた。

(麻つくりの句)

散る花を 蒔きこむ麻の 畑かな

竿干の 麻に光るや 秋の風

麻はまだ 五尺に足らし 青あらし

世に誇る 吾妻錦や カキの里

照りつける 空に麻刈り 急ぎけり

買い競り 麻商人や 秋の暮

生麻煮る 人やよく見る 天の川

トンボ飛ぶ 下に干す麻 並べけり

(麻ひきうた)

麻の背たけはさ 背たけはうんとひびろよ

麻、麻よ

坊も大きゆうなれ 早よのびろ

早よのびろ 麻 麻よ

紅もつけずに麻の中

麻の中、麻 麻よ

主が近づく近づく 祭りも近いよ

麻 麻よ

麻もこぎとりや なお近い

なお近い 麻 麻よ

麻、麻よ

嫁をとるならさ とるなら吾妻育ちよ

(オカキジジイ)

大正から昭和にかけてのころ、オカキヤジジイといわれていた人が村へ来てオカキをつくっていたが、名前は知らない。

(ミナミ)

岩島麻と甘楽郡は昔から関係が深く、ミナミといえは甘楽郡のことと理解されていた。しかし、どのくらいの関係なのかはあまり知らない。

(岩下の祇園)

明治二十六年、岩下の市の開市を祝つて始められたのがはじまりである。それまで、村人が長い間願っていた市が、その年の七月二十日に許可された。五、十の市(六斎市)で、青物市、麻の市が出て活気にあふれ、にぎわつた。そこでこれを祝つて樽みこしを出したが、それにあきたらない村人が浄財を集めて一金二百五円の寄附金を持つて京都へ行き、百円でオミコンを買つて残金を旅費として村人たちが何日もかかつて担いで運んで来たのが、岩下祇園の神輿であるといひ、これで始まつたのが「岩下祇園」であるといひ。

(吾妻麻組合員)

吾妻麻組合員についても「吾妻麻一班」に一覧が上げられているが、すべてが麻生産農家であつたとみれば、原町、岩島村、坂上村、長野原町に分布し、総数三百三十八戸を数えることができる。大学別に上げれば次の通りである。

原町	五戸	岩下	四〇
川戸	二三	松谷	一〇
坂上村大戸	一一	三島西	五二
大柏木	一一	三島東	一一八
長野原町林	一〇	厚田	八
岩島村郷原	一四	合計	三三八戸
矢倉	二五		

(麻織物機械講習)

岩島の産葉は養蚕と大麻であり、大麻を加工して販売するならば収入は更に増すであろうと研究が進められ、大正七年組合役員が富山県、石川県、京都市、大阪市、奈良県を巡り視察した結果、奈良県より二名の講師を招いて、同年三月十二日より三月二十六日までの十五日間、役場で大麻機械講習会を実施した。出席者七十七名、八日間以上出席者は五十名であつたという。

こうした下地があつたとき、昭和二年五月大霜害にあい、その救済と農村刷新のためと大麻加工実現のため麻布機械の技術伝習生を奈良県に派遣することが計画され、昭和二年十一月と翌三年十月の二回、二名の講習生を派遣し、帰村後伝習所を開いて講習会をやつている。しかし折からの不況期のことと、これをのりきれず、高くつきすぎて製品も自家用程度のことになり岩島に根つかず、本物にならずに終つた。

近年、伊勢崎市の興機織工業試験場で麻の特色を生かした「麻ぼくし耕」を完成させたが、この原料の麻糸を紡いだのは生原の石村もとさんであつた。奈良県までも派遣されて機械技術を伝えた二人の伝習生の一人、丸橋いう(現在、高橋姓)さんは健在である。

(麻の将来)

麻は百人手間といい、タバコの百人手間と同じにいわれる。麻は天気に左右されることが多く、やり方が昔風で若者がふり向かないばかりか、オヒキの刃がなくなつてしまつたために、収入はあるがコンニヤクや養蚕に追われてしまつた。養蚕は戸数が減つたが、一戸前の飼育数は減つていない。

(コンニヤク)

震災後は、麻の間屋でありながらコンニヤクを栽培したくらいで名久田村(当時)の小林村長に話して、甘楽から講師を招いて講習会を開き、コンニヤク栽培を奨励したくらいである。

(三島 湯浅栄太郎氏・談)

小学校卒業と同時に、栃木県鹿沼市の麻屋 岡本商店へ奉公した。そのころは麻組合はなく、組合もつぶれるので貯金をどうするかで村中が大さわぎをしていたあとだつた。

奉公先では、麻栽培農家から麻を買い集めて、東京、大阪の業者に納入していたので、数え年十六才で買い付けに出されたのだから主人もえらかつたものと思う。自転車を買ってもらい、棒ばかりをもつて買に行き、一駄三十貫でいくらで商談をまとめ、内金だけ現金で、あとは銀行小切手で話をつけて、現物は当日運搬した。当時は、検査がないので自分の目で見て買入れたものである。上の方にいいものをおき、アノコは下等のものを入れた麻もあつた。そんな中で四トン車一台くらいは買えた。

(原町 斉藤万作氏・談)

復員後間もなくの昭和二十二年に、矢倉の横町の長屋で漁網用の糸や漁業用の釣糸の生産を始めた。神奈川県の伊勢原市の工場で技術を習つて、その古い機械を入れて始めたもので、単純な機械だつた。麻は、長繊維なので大量生産には向かず、麻を素手でさいてもとをつくり、片摺り機に入れて片摺り、更に双子糸の場合は二本合せて摺り合せて糸をつくる。その人の手性にもよるが、糸は千葉県勝浦の漁網屋に行つたりして毎月一、二回ほど外交に出て、注文は電話や電報で受けた。サバ、カツオ、イカ釣り用の釣糸だつた。最初は珍しく好評であつたが、三十年ころになるとナイロン糸が普及して次第に賣えて行つた。ナイロン糸の出はじめころは、手ざわりがらがつて老漁師がいやがつて麻糸が強かつたが、麻は、袖浚をくれて使わないと弱かつた

ので、どうしようもなかつた。

(原町 齊藤万作氏・談)

(岩島村農業協同組合麻糸加工所)

昭和二十五、六年のころ麻が再統制されて、個人の加工を認めないということになり、齊藤万作氏は岩島農協に籍を置いて、自分の工場と農協の工場との両方を管理するようになった。当初七人で始めたが、最盛期、農協と合併時には三十人ほどで生産は一日十ノ十五噸、年間で三、五トンから三、六トンの生産をしていた。盛期は二十五、六年から三十二年の間で、三十二年ころからナイロン糸のえいきょうが強くなって来て三十五、六年ころ終りになつた。

原料麻は、地元糸を仕入れてやつた。直接買い入れと、農協買い入れのものとでやつていた。製品の規格は、すべて百尋の長さで統一して重量で規格をきめていた。

(原町 齊藤万作氏・談)

八、資料

大正十二年九月

大麻栽培ノ方法

吾妻郡岩島村

片貝 新十郎

(表紙)

前略

大麻栽培の方法

一、氣候

麻ハ温帯ノ地ニ栽培ス、成熟期短キヲ以テ我地方ニ於テハ播種後收穫期マデ百八日乃至百十五日ヲ要ス。麻ノ栽培ト降霜トハ密接ノ關係アリ、春季最終ノ降霜止ム事早キ年ハ麻ノ成長ヲ能クスルモノナリ、又霜ニ次デ肝要ナル条件ハ温度ノ変化、暴風雨等ナリ、播種後收穫迄ニ温度激変シテ俄ニ低下スル時ハ成長ヲ妨ゲ、一時成育ヲ止ムル事アリ、又、五、六月頃ニ至リテ大風暴風雨等アルトキハ、收穫絶無トナル如キ場合アリ、故ニ温度適順ニシテ暴風雨又ハ霜害ナキ時ハ、豊作ヲ見ルニ至ルベシ

二、土質

土質ハ砂質壤土、壤土、輕粘真土等ヲ適當トシ、土地ハ稍南へ傾斜シテ最少量ノ湿氣ヲ蓄ル場所ヲ最良トス

麻ヲ栽培スルニ際シ其ノ伸長宜キ土地ハ安山岩ノ崩壊ニ依リテ生成シタルモノニシテ、一般ニ酸化鉄ヲ有スル事多クシテ、磷酸吸取力モ概シテ大ナルヲ以テ、此ノ土質ニハ適量ノ磷酸質肥料ヲ施ス事肝要ナリ、此ノ土壤ノ主要成分タル窒素ノ量ハ稍多キモ、磷酸加里ノ分量少キ事アリ、以テ窒素質肥料ト共ニ磷酸質肥料、加里質肥料ノ施用ヲ怠ル可ラズ、又、麻ノ伸長セザル土地ハ花崗岩ノ崩壊ニヨリテ生成シタルモノニシテ、土地堅ク、窒素肥料ノ吸取多大ナルモノナレドモ、之ニ反シテ磷酸肥料ノ効驗ハ薄弱ナリ、故ニ此ノ土壤ハ窒素肥料ヲ多量ニ施シテ其ノ理学的性質ノ改良ト共ニ之ヲ肥料ナラシムル事ヲ得ルモノニシテ磷酸質肥料ヲ施スモ概シテ其ノ効果少ク、加里ハ相当ニ之ヲ有スルガ故ニ、窒素肥料ノ施用ヲ怠ラザル事肝要ナリ

三、肥料

一、打肥

打肥ハ一月ヨリ三月中旬迄ニ降雪ノ際、尿若クハ人糞尿ヲ畑一面ニ撒布打肥トス、都合二回乃至三回トス、人尿ハ其ノママ、人糞尿ハ四升ヲ一荷トシ、十二荷位ヲ施スモノトス、

二、掛肥

掛肥トハ、畑耕耘ノ際、未熟糞肥ヲ引キ込ムヲ云ウ、一反歩ニツキ百五十貫以下トスベシ、耕耘時期ハ十一月下旬ヨリ十二月上旬迄ヲ第一回トシ、翌年二月下旬ヨリ三月上旬迄、第二回、三月中旬ヨリ同月下旬迄ヲ第三回トス、此ノ三回目ノ際引込ムベシ

三、元肥

元肥トハ、播種ノ際ニ肌肥トスルモノヲ云ウ、其ノ分量ハ左ノ如シ

既肥百五十九貫、人糞尿老石五斗、米糠八斗、畜糞(乾燥)四斗四升、酒粕十七貫五百匁、酒粕の代リニ大豆粕六貫ヲ使用スルコトアリ

以上分量中畜糞、酒粕、大豆粕ハ水ヲ入レテ溶解シテ用ユベシ、右ハ能ク混和シテ踏切り、アタカモ摺鉢ヲ伏セタル如クニ塊メ、糞尿ノ類ヲ覆ヒテ備イ置キ、米糠ヲ醱酵セシムベシ。又、當時ハ人糞尿ノ如キ水ノ物ハ打肥トシ、其ノ他既肥、米糠、畜糞ハ乾燥ノママ畦間ニ撒布スルモノアリ

場所ニヨリ播種ノ際、水肥トシタル時、硫酸アンモニア、過燐酸石灰、完全人造肥料ヲ適量ニ使用スベシ

(備考) 前表中既肥ハ夏肥ニシテ、夏土用中ノモノヲ最良トス、敷タシテ麻ノ伸長適度ノ土壌ニハ人糞尿ノ如キ窒素質肥料ヲ或シ、米糠ノ如キ燐酸質肥料、加里肥料ヲ増スコトス、硬ク麻ノ伸長宜シカラザル土壌ニハ燐酸加里肥料ヲ減シ窒素肥料ヲ増スコトニ心ヲ用ウル事

四、栽培方法

一、播種期

播種期時期ハ、四月上旬ヨリ中旬迄トス、第三回耕耘後、晴天三四日続キテ、土壌乾燥セル時、金鋤手ニテ土塊ヲ崩かいして平カニシ、克久乾燥セル時、畦巾八寸乃至一尺迄ノ畦ヲ定メ、前述セシ踏肥ヲ直径四尺、深さ一尺五寸位ノ大桶ニ入レ、九斗五升ヨリ一石ぐらいの水ニ溶解シテ水肥トナシ、畦間ニ引キ、直接ニ種子一反歩ニ付キ四升ヲ蒔キ、畦ヲ小畝ニテ作り乍ラ、土ヲ薄ク平カニ覆ウモノナリ

二、手入

播種後六、七日ニシテ発芽ヲ見ルナリ、其ノ後約十日間ヲ経、五、六寸位ニ伸長スルヲ適度トシ、晴天ノ日ヲ撰ミテ第一回ノ間引ヲナシ、直チニ中耕ヲ行ウ、後一尺ヨリ二、三寸位ニ伸長セシ時、又第二回ノ間引ヲ行ウモノトス、其ノ後大畝收穫期迄ハ別ニ施肥、手入無シ

三、收穫期及方法

播種後百八日ヨリ百十五日ヲ經過スレバ、收穫期トナル、即チ七月下旬ヨリ八月上旬トナルナリ、其ノ時ハ、大麻ノ葉黄色ヲ

帯ブルヲ普通トス、而シテ其ノ時ニ至リ、拔採トテ畑ヨリ抜キ取り、長麻、中麻、短麻、太麻、屑麻ノ五通りニスルヲ常トス、ソレヲ麻切鎌ト称シ、長サ 寸位ノ柄ノ短キモノニテ根・葉ヲ取り、凡ソ一尺廻リニ東ネ、ソレヲ三個ズツ東ネテ生麻一東ト称ス、而シテ長麻ハ六尺五寸ニ切留メ、中麻ハ、長キモノハ長麻ト同等ニ、短キモノハ六尺四寸以下トス、短麻ハ五尺八寸ヨリ六尺ニ、太麻、屑麻ハ適度ニシ、屑麻ハ大概東ネ麻トナス

大麻ノ管理及加工ノ方法（附採種ノ方法）

採取シタル生麻ハ、之ヲ高サ四尺、長徑二尺、短徑一尺八寸位ノ、筒形ノ桶ニ湯ヲ沸騰セシメ、生麻一東ゾツ、三分間浸入スベシ、（生麻五東位ヲ度トシ）晴天ノ日ニ一日乾シ、生麻二東合セテ一東トス、ソレヨリ十日間干シ、次々上湯ト称シテマタモ湯ニ入レ、取り出シテ一日間ヨク干シテ家屋内ニ横タエテ貯藏ス、乾燥ノ際、雨天連続スルコト度々アル時ハ、稍乾燥シタルモノハ仮ニ屋内ニ貯藏ス、又、乾燥セザルモノハ「バクテリヤ」ノ作用ニ依リテ黒点ヲ生ジ、粘氣ヲ催ス、然ル故「バクテリヤ」ノ繁殖ヲ防グニ注意シ熱湯ニ浸シテ屋内ニ乾ゲ、火力ヲ以テ干スナリ

二、加工ノ方法

イヨイヨ干揚タル時ハ即チ八月下旬ナリ、其ノ時干麻一東ヲ四分シテ東ネオキ、麻舟ト称シテ深サ八寸、長サ七尺、幅二尺五寸位ノ木舟ニ水ヲ盛り、東ネオキタル大麻ヲ浸シテ乾燥セザル薄暗キ所ニ横ニシ、蹠ノ類ヲ掛ケ、温度ハ華氏寒暖計ノオヨソ七十度位トシ、ナルベク一日二回、朝夕ト湿シテ貯藏スベシ、其ノ翌日モ前日通りイタシ、毎日休ム事ナク繰返セバ、三日目位ニシテヨウヤク麻皮ニ粘氣ヲ生ズ、此ノ時ヲ剥取りノ好時期トス、此ノ期ニ至リテ麻殻ヲ取り出シ、太キハ二、フツウハ三本ツツヲ左手ニ持チ、右手ヲ以テ根本ノ方ヲ三、四寸折り、其ノ折リ口ノ皮ヲ右手ニ持チ、左手ニテ麻殻ヲ平ニ持チテ剥取り、ソレヲ一手トシテ細長ク曲ゲテ重積シ（但シ干麻一東ヲ四分シタルモノヲ一結トス）、日光ニ當ラザル棟屋内ニ掛ケオキ、而シテ別ニ備イオキタル木舟ニ水ヲ盛り、前掛ケオキタル麻皮ヲ水ニ入レテ直チニ取り上ゲテ、軽ク絞リ、加工ニ取りカカルナリ

加工ニ取り掛ルニハ、高サ五、六寸、長サ八尺ヨリ一尺位、幅七寸位ノ箱ニ類似シタル腰掛台ヲ備イオキ、之ニ腰ヲ掛ケ、右膝ヲ屈折シテ、足ヲ腰掛台下ニ入レ、左膝ヲ屈折シテ直立ニシ、マタ、麻引台ト称スルモノヲ稍斜メ五寸前ニ備ウベシ

其ノ麻引台ノ構造ハ、高サ三、四寸、幅四寸、長サ二尺五寸位ノ台ヲ向ウノ端ハ前ヨリモ三分下リ、中央ニ分円周ノ一部如ク低キヲ良シトス、ソレニ「方言麻板」ト称スル信州木曾山中ニ有ル老松木ニシテ正目ノ板ヲ張り、前端ニ「方言サン」ト称スル

厚ミ一分五厘ヨリ二分幅五分、長サ四寸、即チ麻引台ノ幅ト同ジモノノ木片ニテ、高所ヲ作ルモノナリ、其ノ「サン」ノ高サハ板面ヨリ三分五厘ヨリ四分位ヲ良トス、但シ「サン」ハ片ヲ縦ニ用イル可シ、其ノ外「方言ヲカキ」ト称スル麻引刺刀ヲ木片ニ附シタルモノアリ、ソコニ於テ道具一式揃イタレバ、精麻ニ取リカカルモノナリ

前水ヨリ取り揚ゲタル麻皮ヲ、一手ツツ台ノ上ニ載セ、右手ニ「麻カキ」ヲ持チ、左手ニ麻皮ヲ持チテ、板ト「麻カキ」ノ間ニ入レ「麻カキ」ヲ以テ表皮及ビ水分ヲ磨撫ナガラ左手ニテ引出シ、尚及バザル所ハ左膝ヲ倒シ之ニ捲ゲテ引出シ、又、持チ直シテ根皮ヲ前ト同様ニ引キ出シ、左ノ方ニ何故トモナク重ネオキ、夕方ニ至リテ、竹竿ニ掛ケ、六枚ヨリ八枚ヲ度トシテ結ビ、又、根本ノ方ヲ五、六寸ヨリ八寸迄ヲ残シテ結ビテ一掛トシ、日カゲニテ乾スナリ、且ツ五・六日ヲ経過セバ、一掛ヲ七ツ合セテ「一ハツシ」トシテソレヲ合セテ五百匁ノ束ニシテ、大紙ニテ包ミ、貯藏スベシ、又此ノ五百匁ノ束ヲ合セテ三貫五百匁トナシ、之ヲ一連ト称スルナリ

三、採種ノ方法

我地方ニ於テハ、既ニ七月下旬、即チ麻拔採ノ際ニハ、畑ノ周圍ニ三畦ヨリ五畦位ヲ残置スベシ、其ノ麻、九月上旬ニ至リテイヨイヨ雄麻開花ス、然ルニ雌麻ハ開花セズシテ実ヲ結ブモノナリ、其ノ期ニ於テ雄麻取りテ行ウ、而シテ十月下旬ヨリ十一月上旬ニ至レバ麻種子ノ收穫期ナリ、斯クテ其ノ期ニ至レバ鎌ニテ刈リ取り、縄ニテシバリ、小屋、物置等ノ軒下ニ垂シテ乾燥スルモノナリ、イヨイヨ充分乾燥セバ、持チ來リ、序ノ類ヲ庭園ニ敷キ棒ニテ打落トシ、夾ト織トヲ唐箕ニテ吹キ分ケテ、箱ノ類ニ入レ、貯藏ス

四、需用地ト大麻ノ格付

本村ノ大麻需用地ハ、北陸道、東海道、畿内、山陰道等ヲ主トシ、其ノ他各地ニ涉リテ多少ノ取引ヲ行イツツアリ、本村中ノ生産人ノ製麻ニ付キ、其ノ格付ヲナスニ當リ、最も必要ナル条件ハ、生産者ノ技術ニ依ル優劣ト管理ノ良否ニ依リテ製品ニ及ボス用途ノ適不適ヲ考査シ、検査人ニ於テ品等呼号ヲ附ス、

今、左ニ其ノ格付ニ依ル品等及呼号、其ノ用途、並ビニ需用地及ビ生産地方等ノ概況ヲ記シテ參考ニ資セントス

第一（呼号）吾妻錦

本村製麻格付ニ於ケル最優等品ニシテ、其ノ用途ハ上等ノ網糸、鯉、鯛等ノ釣糸、最上等ノ麻織物用、原料細絲、帳繰糸、弓

弦、捕鳥用霞網糸、夏洋服地原料、祝賀贈答品、高等裝飾品等ニシテ、コレガ需用地トシテハ織物原料トシテ富山県、石川県、奈良県ニ販路ヲ有シ、漁業用トシテハ三重県、静岡県、宮城県、愛媛県等へ販売シ、弓弦用トシテハ東京府へ販売セリ、其ノ他少量ヅツノ使用ハ各府県へ販売セリ、而シテ吾妻錦ハコレヲ特等及並等ニ区分シ、特等ハ引力、色沢、織維ニ独特ナル優美、強靱ヲ備ヘ、他ニ類似ナキモノニシテ、其ノ産額四百貫内外ニテ、コレガ産地ハ本郡岩島村大字三島ノ一部ニ限レリ、並等ノモノ、其ノ産額二千貫内外、三島、厚田ノ二大字ヨリ生産シ、他ノ大字ヨリ産出セルモノハ製麻當時類似セルモノモ、翌春ニ至リ梅雨ノ季節ヲ経レバ、色沢ヲ失シ、引力減減シ、品質悪変スルノオソレアリ、故ニ本村ハ最優等品ノ査定ニ當リテハ、管理、加工、生産地等ヲモ調査シ、需用先ニ於テ欠点ヲ採サザランコトニ注意シ、以テ本村生産人製麻ノ真価ヲ際サザルコトニ腐心ス

第二(呼号)黄金

本村ノ製麻格付ニ於ケル優等品ニシテ、其ノ用途ハ上等ノ麻布用純綿、漁網用糸、夏洋服地原料、祝賀贈答品、縮布原料等ニシテ、コレガ需用地トシテハ富山県、奈良県、石川県、島根県、三重県、新潟県、千葉県、山口県、静岡県、愛媛県、宮城県、等へ販売ス

黄金階級ノ麻ハ、其ノ産額四千貫内外ニシテ、岩島村ニ於テハ各大字ヨリ製出ヲ見ルモ、他ノ町村ニ在リテハ原町ノ一部ヨリ僅少ノ産出アル外、其ノ製出ヲ見ザルナリ

第三(呼号)満月

本村製麻格付ニ於ケル一等品ニシテ、其ノ用途ハ中等純綿、漁網用糸、蚊張原料糸、覺従糸、家庭日用品等ニシテ、コレガ需用地トシテハ愛知県、富山県、奈良県、島根県、新潟県、三重県、山口県、静岡県、愛媛県、宮城県、青森県へ販売セリ
満月階級ノ麻ハ年額五千六百貫ニシテ、岩島村、泉町、坂上村ノ三ヶ町村ヨリ製出セラル

第四(呼号)山吹

本村製麻格付ニ於ケル二等品ニシテ、其ノ用途ハ漁網用糸、蚊張原料糸、暖簾繩、苧纒糸、馬具、真繩等ニシテ、コレガ需用地ハ新潟県、三重県、愛知県、千葉県、静岡県、東京府、神奈川県等へ販売セリ

山吹階級ノ麻ハ、年産額四千貫内外ニシテ岩島村、原町、坂上村ノ三ヶ町村ヨリ製出ス

第五(呼号) 黄鳥

本村製麻格付ニ於ケル三等品ニシテ、其ノ用途ハ漁網用具、蚊帳原料糸、蜜網原料糸、細繩、馬具、真纒等ナリ、需用地ノ重ナルモノハ県内及愛知県、新潟県、千葉県、鳥取県等へ販売ス、黄鳥階級ノ麻ハ年産額二千五百貫内外ニシテ、岩島村、坂上村、原町ノ三ヶ町村ヨリ製出ス

第六(呼号) 紅葉

本村製麻格付ニ於ケル四等品ニシテ、其ノ用途ハ繩用、網用、真纒用、馬具、家庭用等ニシテ、需用地ハ県内及東京市、愛知県、新潟県、千葉県、鳥取県等へ販売セリ、紅葉階級ノ麻ハ年産額千五百貫内外ニシテ、岩島村、原町、坂上村ノ三ヶ町村ヨリ製出ス

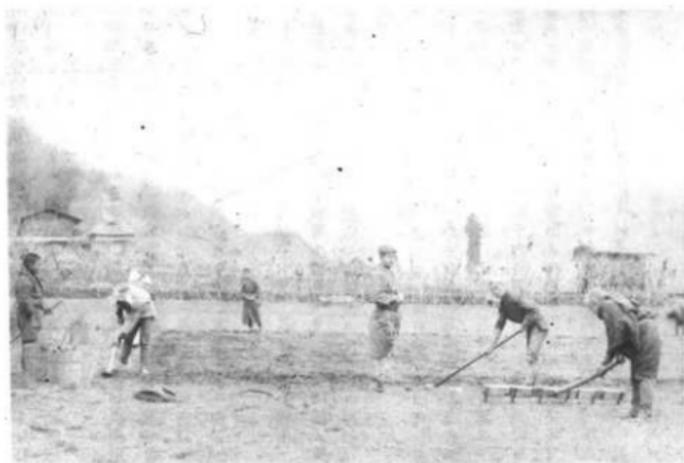
第七(呼号) 長野原

本村製麻格付ニ於ケル等外品ニシテ、其ノ用途ハ良キモノニ在リテハ真纒トナルモ、大部分ハ網用ナリ、又、馬具用トシテ用イル需要先ハ県内及愛知、三重、東京ノ各府県へ販売ス

長野原階級ノ麻ハ、年額四千六百貫内外ニシテ、長野原、六合村ノ二ヶ村ヨリ製出ス、而シテ此ノ麻ハ、管理及ビ加工ノ方法粗放ニシテトウテイ岩島村製出ノモノト比較スル能ワズ、本組合ノ区域ニ編入後次第日浅ク、改善ヲ普及スルノ暇ナキ今日ニ於テハ、如何トモスル能ワズ、サレド近キ将来ヲ期シ、根本的改革ヲ遂行シ、優良ナル製麻ノ産地ヲサシムル様漸次コレが其ノ改良方法ノ講究ヲ怠ラザルベシ。

(阪本 英一)

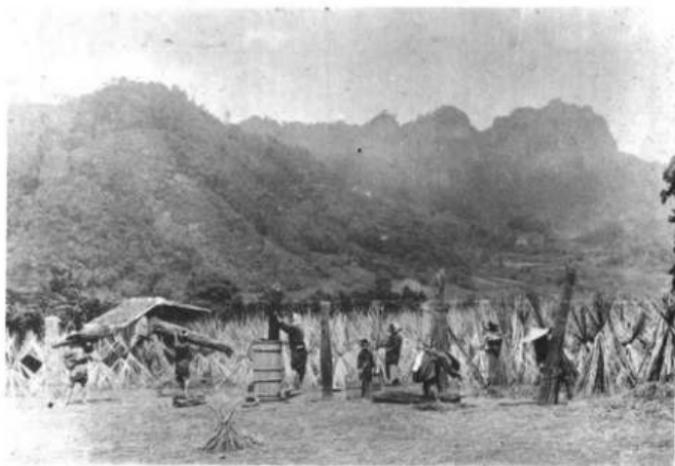
大正～昭和初期の岩島麻写真



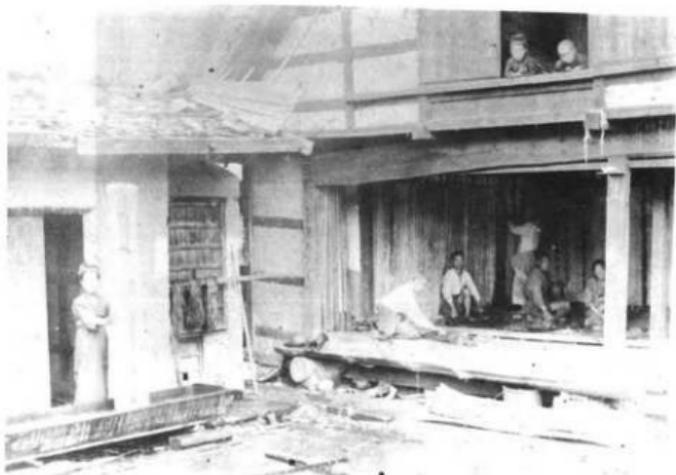
① 播種



② 麻こぎ



⑤ 麻むし・乾燥



④ ネド・麻ひき



⑤
麻ひき



⑥
出荷



(三島 丸橋泰造提供)

古文書から見た岩島の麻

吾妻の麻は、いつごろから栽培され、利用され、商品として出されるようになったかを郡内に残された古文書でもつて述べることが本項のテーマである。

吾妻郡は、「鶴舞う形の群馬県」の鶴の尾の部分に当たるところであり、群馬県総面積の約二割に当る、一二七七平方呎の面積に、県人口の四、六パーセントの人々が住む。総面積の約八割が山地である。吾妻郡を西から東へ流れる吾妻川は、上信国境の四河山から流れ出して、嬭窓村三原附近と、中之条町附近に盆地をつくり出している。吾妻川は、川原湯附近で川巾がせばまり、景勝吾妻溪谷をつくり、吾妻郡を東西に分けている。

西吾妻は、嬭窓・長野原・草津・六合の四ヶ町村であり、信州文化の影響が強い。東吾妻は、中之条・吾妻・東・高山の四ヶ町村があり、中之条盆地を中心に、文化が発達してきた。

現在、吾妻郡内で麻を作っているのは、吾妻町の三島地区である。麻作りの適地は、雨量が多くて、水はけがよいこと、日照のよいこと、地味の良いことその他に、良い麻を作るために必要なこととして、夏の風が当たらないところが良い。東と南に山を持つていて、夏の嵐などの影響の少ない、三島地区は、そうした条件を持ち、麻の名産地となつた。

麻の品質の良否が強く要求されるようになってくると「岩島

の麻」が有名になつてくるが、織物の原料等に使用した古い時代には、広範囲に作られていたようである。

麻についての文献史料としては、沼田藩の武士であつた加沢平次左衛門の「加沢記」の中に次のような記事がある。

① 加沢記巻之三「海野兄弟御退治、矢沢頼綱無二心事」

海野兄弟と申は、吾妻三原の地頭滋野の未業羽尾治部幸世道雲入道、二男海野長門守幸光、同能登守輝幸と申しけり。道雲入道は生害あつて命弟二人が斉藤越前守に属しける。斉藤没落の節甲府へ忠節あつて、三原郷御取立あつて天正三年夏の頃、岩櫃の城被預、勝頼公○○○○一門悉く安堵の思をなして、吾妻守護代なり。(中略)かくて世の中不定ければ海野兄弟両城を御固め給は、吾妻一郡は兄弟へ御渡しあらんと昌幸公(真田)御約束ありしに、吾妻郡内、所々を給人に恩附せられければ、兄弟無寛東思われ、昌幸公に佐藤豊後、渡利常陸介、兩人を使者として申されければ、昌幸公御返答に、尤先年約諾の申ごとく、貴方へ可相渡御相違なし。然れども、鎌原、湯本、植栗、池田、浦野、西久保、横谷此七人は除き、其外は不残御被官たるべく勿論恩賞の事も御斗たるべし。と御返事ありければ、七人を付らざる事心得がたしとて、逆心の企圖然たる旨、彼七人の加判にて、湯本、鎌原の処より、同年(天正九年)十一月上

句に注進ありければ、昌幸公（略）早速比旨を甲府へ注進し給て打手を差向らる。（略）同月二十一日の午時、岩櫃に御着陣あつて、長門守居城に押寄せけり、長門守は、其年七十五、近年老衰して不眠なり。佐藤、鹿野、蜂須賀、渡利、割田（略）の一角を先として、真田の御味方に参て、一度にどつと寄せければ、幸光眼見ざりけれども居間を不遇、甲冑を帯し、座鋪の内へ麻がらを散らせ、敵寄采り麻がらを踏折りし方を三尺五寸の太刀を以つて払伐りにし給えば、矢庭に十四五人伐伏せ残兵四方へはつと引ければ、是迄とて腹十文字に被切り鎧に火をかけ七十五歳を最期とし岩櫃の草葉の露と消給ひける。」

麻がらを散り敷いたことで麻を作つていたことを推定することが出来る。岩櫃城周辺での麻作りがなされていた。江戸初期の史料で、真田伊賀守信利が改易となり、その直後に作られた「天和元年上野沼田領品々覚書」（加沢記の作者と同じ加沢平次左衛門の著作）に次の項目がある。

② 天和元年上野沼田領品々覚書（加沢平次左衛門原著、萩原進

編校註による。）

綱 麻 之 事

一、綱麻其年之相場ヲ以畑方年買差引申候、但し吟味仕候者我妻郡原町矢島五郎兵衛と申百姓仕候。依之地役之儀赦免仕候事。

真田氏は、真田紐をつくり全国的に売り歩いたといわれている。真田紐は、真田幸村の考案したもので、幸村は九度山に蟄居中に、家来に作らせ、豊臣方のための謀報活動を兼ねるこの紐は、天正ごろには、すでに作られていたといわれ、その真田氏の領内である吾妻の原町に、綱麻を吟味する矢島五郎兵衛を置いている。麻の産出地であることを間接的にはあるが示している史料である。

⑤ 林昌寺文書（中之条町伊勢町）

（表紙） 三門造立勳化 宝満山林昌寺

一金三両 伊勢町 伊勢町 弥市右衛門

一金三両 藤 兵衛

一金三両 重右衛門

一金三両 所左衛門

一金老兩 勘左衛門

（以下 中略）

他且那 岩下村中

一麻骨四拾六駄三束

一麻骨三拾八束 松尾名主半左衛門

一麻骨三拾八束 横谷名主助右衛門

- 他旦那
三島名主佐次平
一 麻骨百五拾六束
一 麻骨三拾駄
矢倉名主平兵衛
一 麻骨式十八駄
(廻) 江原名主三右衛門
一 麻骨式十五駄
厚田名主源七竜藏

(中略)

大工三千人

大工 室田清水弥次兵衛

大工 吉三郎

大工 弥七郎

あら磨き千人

木引 徳右衛門

木引共二

ソマ 新右衛門

人足一万五千人

自打飯ニ而 且中他旦那共

千時元文五申年、寛保三亥年迄造立

普請入用式百両余者借用也

上野国我妻郡伊勢町

宝満山林昌寺

現任金峰丈

海蔵寺実参

長老弘参

如是軒崎鳳

道心全心

- 当町名主
青柳重右衛門
年寄
小坂橋藤兵衛
同
久保田弥市右衛門

この史料は、中之条町、伊勢町の曹洞宗林昌寺(開基は、真田一族で、真田信幸の家老をつとめた矢沢頼綱と伝えられている。)の山門を造立した時(元文五(一七三六)年から寛保三(一七四四)年までの七年間)の動化帳である。旦那達の寄進にまじつて、他旦那(岩下応永寺の旦那で同宗ではあるけれど旦那ではない)である岩島地区の名主達が、屋根材の麻骨(おがら)を寄進している。林昌寺の旦那の多い中之条盆地の周辺にては、屋根材の下地である麻がらを得ることが出来ないで、他旦那である岩島地区から麻がらを得ている。とくに、岩下村からは、四十六駄三束というたくさんの麻がらが寄附されていて、麻を扱っている人が多かつたことが知れる。十八世紀の前半頃に、吾妻の麻としてかなりの栽培があつたと推定される。しかし、これらの麻を商品として「江戸出し」がはじまるのは十九世紀に入つてからであり、岩下村の作問商人として北国屋大見屋等が活躍するのは、天保期に入つてからである。それより先、化政期に片貝清兵衛家の活躍が見られる。

④ 片貝亀録文書（吾妻町岩下） 岩島村誌より抄録

（表紙）

文化二年丑ノ八月吉日

江戸麻作リ上諸掛寛帳

上州我妻郡岩下村

片貝清兵衛

（表紙裏）

原町 沢川通り

後藤兵右衛門

金古

今成武右衛門

高崎

角田八左衛門

倉賀野

田口 五兵衛

江戸出し問屋

新川岸通り

中之条町

田村与五兵衛

渋川宿

大嶋太郎兵衛

惣社宿

曾我重郎右衛門

新川岸

沼田善左衛門

江戸本舟町

白子屋清右衛門

覚

文化二年丑ノ八月吉日

麻荷物初メ而出し

江戸本舟町

白子屋清右衛門

同

伊勢屋徳三郎

白子屋清右衛門殿文化七年午八月、断達兼候而、無換年賦金額ニ参リ、替之承知仕候、千三百四拾兩高之金子、午前ヤサケ年賦ニ相成

金印

手前分金二十匁兩ト六匁八分也
小印・王印十八個、極印貳個

一 麻百二十貫目

代金拾八兩三分ト三百文仕入

外ニカゝリ物

一、百五拾文巻駄 川原畑 だちん

一、貳百五拾文式駄 大平 だちん

一、百文 巻駄 横谷村 だちん

一、百二十四文 細谷村 だちん

一、五百文 むしろ式拾枚

一、二十文 人足

一、三百文 なわチ

一、金巻分式朱 ○○○疊入つくりちん

巻駄ニ付 百三十三式文

一、六百六拾四文 中之条迄だちん

一、三貫四百三拾六文 中之条 かしまで、だちん

金巻兩ト百四文

八月二十八日後荷

一、麻百二十五貫め

代金拾九兩貳朱ト百五拾貳文仕入金

八月二十九日

一、六拾四文 高間 だちん

一、百文 松尾村 だちん

一、五拾文 大村 だちん

八月三日

一、百五拾文 川原畑 だちん

一、貳百六文 なわ六百二十

一、六十四文 なわ貳百

一、五百文 むしろ二十

一、六百六拾四文 だちん

八月十三日

一、五百五十文 ○○○○頼出ス小便

一、金貳分 中之条 川岸迄だちん

一、貳百文 人足

金卷兩ト四百三拾文

初荷代金貳拾四兩貳分買上

後荷代金貳拾三兩買上

金貳兩ト五百三拾四文 つりだちん諸色

二口買上

金四拾四兩三分ト卷ノ百八文買上

内だちんかゝり引

差引而

金四拾貳兩三分ト五百七拾文買上

文化三年寅ノ三月

江戸麻出し

寅ノ三月

一、百拾貫五百五拾め

代金貳拾貳兩三分ト三百六拾文

出金五人割金四兩貳分ト新治部分四百七文かり入

外ニ麻貳貫め

代金卷分貳朱

卷人分五百貳文也、五ツ割

二口ノ(以下切れ)

八月二十五日買付

二十六兩 拾八圓

十九兩 貳圓

二口ノ仕切金貳拾五兩卷分ト三百二十四文

内卷兩卷朱三百二十四文江戸代引取

残分買上金貳拾四兩三文取

差引金貳兩貳朱利也

八月十八日出

一、百二十五貫め 麻

代金貳拾兩卷分貳朱ト七百二十四文出金

外ニ諸掛リ老光ト拾八文

〆金貳拾兩卷分貳朱ト七百五拾三文出金

九月二十五日江戸ニ而仕切申候

二十五兩 十七固

二十兩 貳固

十六兩 壹固

〆二十固

内金壹兩卷分江戸ニ而引

買上

差引残而 代金貳拾貳兩三分ト六百文江戸ニ而仕切

内卷兩ト拾八文入用引

差引而金壹兩卷分ト五百七拾八文利

文化四年卯八月二十二日麻仕入

八月二十三日

一、百二十四貫四百匁 坪目仕入

代金拾九兩三分貳朱ト三百八拾二文仕入

一、百二十五貫め

代金拾九兩貳分ト貳百四拾四文

外ニ諸掛リ

六百三拾貳文 村だちん

貳朱ト三百文 十日疊八つくり賃

三百文 なわチ

六百二十四文 原町迄だちん五たん

金貳分 くらかの迄だちん

六百五拾文 むしろ二十枚かゝり

〆金壹兩ト三拾文

卯八月二十九日出ス

諸掛リ共ニ

〆金貳拾兩三分貳朱ト六百拾兩文仕入金

卯十二月三日ニ請取

此買上金貳拾貳兩卷分貳朱ト六百四十四文

此利金壹兩貳分ト三拾三文リ

卯十月作り

一、四拾五貫四百匁仕入

卷買五百匁 青右衛門

貳朱ト五百文 長右衛門子

二口〆壹兩貳朱也 佐兵衛

四、代金三分也

五、五拾六貫九百ぬ

一、四十貳貫ぬ 川原湯・川原畑

代金六兩三分也

貳貫五百ぬ 内遣

三貫ぬ 庄右衛門

貳分也

三貫ぬ 残り物

貳分ト二百文

六百ぬ 弥右衛門

六百十二文

九貫百ぬ

拾二貫ぬ 新治郎

代金老兩三分貳朱三百文

老貫ぬ 貳朱ト貳百文

老貫ぬ 手作

代貳朱ト貳百文

十月十九日作り

二十貳貫ぬ 六十八貫ぬ

金拾貳兩貳朱七百六拾文

五拾三貫九百ぬ 隠居仕入

代金七兩貳分貳朱ト貳百二十七文

代金、九兩三分貳朱ト仕入金百六拾三文

外ニ諸掛リ

貳朱ト貳百文六分 作り質音治郎

三百文 なわ

六百二十四文 原町だちん五駄分

金貳分 倉賀野迄だちん

六百五拾文 むしろ二拾枚

三百文 八足三人

金三分貳朱ト四百二十四文

卯十月作り、作り出金、諸掛リ共ニ惣、金貳拾兩三分ト五百四

拾七文、質上貳拾貳兩三分ト三百文。

(中略)

文化十五年寅ノ二月

一、百七拾貫五百目 坪目

代金拾七兩叁分貳朱 だちん共ニ

三百文 なわチ

六百六拾四文 むしろ二十

百文 人足

貳百文 酒代

七百五拾文 大戸だちん

金叁分 音八

金式分 だちん

金拾八兩卷分式朱ト六百拾六文

白子履行

上印 十五

三つ

二つ

實十一月十一日

売り上金式拾老兩三分也請取

差引金三兩卷分ト五百三拾式文利

文政元年實九月十五日

一、百拾九貫式百匁 坪目

代金拾四兩三分ト五百二十八文 だちん共ニ

三百文 なわチ

六百六拾四文 むしろ二十

式百文 酒代

式朱ト三百文 七人音八

七百五拾文 大戸迄だちん

金式分 かし迄だちん

三分式朱ト五百拾六文

二口金拾五兩三分ト式百文

白子墨三郎行

松印 十五 二十卷兩

竹 三つ 十四兩

イ 二つ 十式兩

七月七日辻で請取

売り上金拾九兩ト五百文取

利金式兩卷分

(中略)

天保亥十年八月七日ニ初メ十七日作り上

八月十八日

一、新麻百拾七貫七百目 坪目

△印玉 代金三拾五兩ト式百文出金

拾式箇仕切り金四拾三兩がへ

松印 三個 同金四拾式兩がへ

竹印 四個 同金三拾三兩がへ

梅印 卷個 二十三兩がえ

八月十九日

一、古麻百式拾貫目 坪目

代金四拾兩也出金

△花印 式拾兩 仕切り金四拾四兩也がへ

諸掛り寛

金老兩式朱也 厚田村関松四拾箇作り貫

代金卷分也 四拾枚むしろ

八百三十式文 堀式本 清助 五兵衛

貳百文 人足式人 鶴吉 伊之助

貳ノ文 四拾箇大戸迄十駄敷貨

老商 倉賀野迄敷貨添

九月二十六日

三百六十四文 高崎 駄ちんなど六分出ス

惣ノ金老兩貳分貳朱ト三ノ四百文 角田へ

八月二十日ニ大戸へ送り申候

九月二十六日ニ江戸江参り彦兵衛殿手前兩人ニ而参り申候分、
彦印ノ金三朱也受入引去り、小使金老兩貳分ト貳百二十六文也

売リ付

利金四兩老分ト百八拾三文

差引残り金貳兩三分ト百八拾三文

古麻帳面ノニ而引申候分

岩下村

片貝清兵衛様

江戸靈岸島銀町

大野屋五左衛門

代惣助殿遺ス

覚

一、麻百拾八貫五百目 坪目

内古麻二十五貫目入兩ニシノ当ニ而引

二口ノ代金三拾六兩ト四十文出金

印式拾箇

内 天印 十七箇 仕切り 金四拾三兩貳分也

地印 貳箇 金三拾三兩也

人印 老箇 金二十二兩也

金三朱也 荷作實岡松殿へ

金貳朱也 むしろ二十枚

仁左衛門 入ル

四百文 なわ千

貳百文 人足式人

金貳分添 倉賀野迄だちん

老ノ文 大戸迄五駄トだちん

五百文 大戸 三ノ倉迄増だちん分遺ス

ノ金三分一朱ト貳ノ百文

八月二十六日ニ大戸送り申候

麻元金百十一兩貳百四十文

惣ノ金三兩老分貳百八十四文諸掛高

惣ノ金百十四兩老分ト五百二十八文

江戸諸掛引去候残り売上

金百拾八兩貳分一朱ト貳百九十三文

大野屋手取金

利金四兩老分ト百八十三文

十月六日改

天保十年亥十一月九日江戸出し申候

權月二日出立而參り十五日夜燔宅仕候直吉供ニつれ申候

百式拾目 坪目

一片印 五拾六箇 古麻

松印 三箇

竹印 卷箇

売上手取金四十兩也かかり色々引去り

右同断

一片印白印 二十箇口 右同断少し新麻入

手取金四十兩かゝり共分引去り

右ニ同じ

一片印 本印式拾箇口

大野屋五左衛門殿出ス

手取金四十兩也

右ニ同じ

一片印 天印拾六箇

一同 地印 四箇口

手取金四十兩也

惣代金百八拾四兩卷朱ト四拾卷文

外ニ駄賃作り賃色々々

金四兩卷分三朱ト式百二十式文

小がかり作賃だらんいろいろ

惣代

金貳兩式分也 江戸小使分

外帳ニ而麻鋪利帳ニ而引

惣売上代金百六拾四兩卷朱ト貳百三十七文

内金四兩三朱ト三百十文

売出し江戸不受取分引

金卷分ト八拾四文 外利帳ニ而引

二口代 金四兩卷分三朱ト式百二十式文

かかり分引

同残る 金百六拾兩也 元金引

又同残る金二十四兩卷朱ト四拾卷文 元金損ニ成ル

積出し残りノ分

子ノ春麻利分

内金拾兩卷分引

差引残り

金拾貳兩三分ト三百八拾九文 損金ニ成リ

此外ニ仕入金利足損ニ御座候

子ノ二月八日光り

越中 八

九川

以上

⑤ 西山三次郎文書（吾妻町岩下一八五四）

（表紙）

天保二年卯正月吉日

荷物払仕上覚帳

（表紙ウラ）

七福神 大入叶 目出度始覚

覚

正月二十八日改上ル

一 印 信州大日向

磯吉殿

四ツ荷ニ而二十八箇

一 六駄片荷

右同日ニ払出ス

一 三百文

磯吉殿

御子息

泊リ共ニ

兩人泊リ

一 老ノ三百五拾四文

為金仁朱・老朱百拾八文

二月十三日相済

正月二十四日

一 四箇 老駄四人

百六十文 右相済

七月十六日

一 四箇 老駄 磯吉殿

〇月五日 長野原 萬吉殿馬

一 八箇 二駄 同人

卯ノ正月式日

一 四箇 磯吉殿

四月十六日相済

覚

正月二十八日 信州大日向

茂左衛門殿

四ツ荷ニ而十箇

一 武駄片荷

一 百五拾文 同日 同人泊リ

駄賃旅籠共ニ

一 五百五拾四文

二月十三日相濟

三月十四日

一 木四ッ荷一

百六十文 相濟

八月三日

一 木拾貳箇 三款

壹 請取

八月十六日

(以下略)

④ 西山三次郎文書(吾妻町岩下一八五四)

(表紙)

戊戌天保九年正月吉日

大福萬覚帳

覚

正月元日

一 入百文

二月五日

一 入貳百拾貳文

儀兵衛とのより年頭

中之条に麻だちん

一出三百文

春遣イ

正月十九日

一出金巻両也

坂引割

世話人儀兵衛

〃

一出金貳分貳朱也

同人

泉五斗代

二月

一出金壹分貳朱

番電院

火事見舞

小遣入用

一入金貳分也

手作

一出貳朱也

かんざし 弥八 一本

一出貳朱也

春夫錢

一出一朱也

小遣イ

荒神様

(中略)

麻入口取

八月朔日

〇〇〇 五〆五百目代

一入金巻兩三分三朱也

文右衛門方充

内金三分三朱取
残巻両者かし

三日 式ノめ代

越後国

一入金三分ト百六拾四文

弥惣次殿

八月五日 巻ノめ

同国

一入金巻分式朱五拾文

龜山殿

一入百七拾式文

越後荷

泉町江參

同月八日

一出六百文

伊左衛門殿

不幸ニ付香代

九日 巻ノ五百匁

越後国

惣吉との

一入金式分一朱也

霜月八日 式ノ式百五十匁

一入三朱也

かわそえ

金藏殿光

一出金式朱也

明神躰金

十一月十一日

一出金巻両式朱也

麦五斗 アワ四斗

原町方之

米五升七合ナリ

一出金巻朱也

応永寺晋山

見舞ニ遣ス

(以下略)

⑦ 西山弘太郎文書(吾妻町岩下一八五三)

(表紙)

嘉永二歳正月吉日

売上帳

中扉に「七福神」「大入叶」と横書してある。

目出度

寛

酉ノ 正月十三日大吉日

一 麻式ノ目

内太へ

外一人口

外金式分仁朱内

百文

大利百文

かへり

川要江九〇目 上蘇江八百匁

高金江三〇五百匁 五〇貳百匁

十九日 行沢

正月二十日

一 麻拾八〇五百目 龜吉殿

代金五兩三分貳朱四百文

目出度 相濟

利金貳分貳朱取入

大利分也

内金貳朱

内金貳朱

内錢四百文

右三人ニク九申候也

正月二十日

一 麻五〇目

行沢 富次郎

代金壹兩貳分三百文

〇〇分三百文 相濟

大利分也

一人

一 外ニ 麻五〇目 大藏分

代式分壹朱五百文 同人

亮

〇〇百文取濟

正月十三日

一 五百目 天神山

代金貳朱貳百文 かし

二十七日相濟

〇〇百五十文

中之条ノ

重兵衛殿

二十四日

一 新印麻五貫目

利口代十貫五百文

一 春印五貫目

利口代拾壹貫文

一 寿印拾貫目

利口代二十六貫文

〇〇四拾七貫五百文

為金七兩〇分貳朱三百文

利為金貳兩也

更助十郎 受取

外二

一百七十式文 だちん先払

舊正月二十五日

平三郎口九〇五百目

孫八口式〇〇

行沢

一 麻拾式〇目

代金四兩也

相済

富次郎

二十九日

上・口

同人

一 同二十五〇目

代八兩式歩卜四百文

直ニ相済

利四百文

三月三日下り

江州

扇屋

旧各注文 大吹江

添長口十〇

利兵衛

一、上麻三拾九〇目

代金拾六兩壹分也

八〇六百目後ニ入

一 同三拾七〇目

代拾三兩三分ト

二百二十八文

上方利金式兩也

次方利金老兩壹分式朱ト

正月二十六日

式百二十八文

内金式兩也受取

松井為替

三月六日

(使) 更喜三郎

内金拾五兩受取

(使) 更太藏

三月二十七日相済

二月三日

一 式拾買目 三〇かへ

亀吉殿

代金六兩式分式朱ト

式百六拾四文

六左衛門口

同

一 拾式〇五百目

同人

代金三兩三分式朱ト式百文

新五郎口

式口〇三拾式〇五百目

右式口〇金拾兩式分ト四百六拾四文

内金四兩也受取

二十二日相済

二十二日相済

二十二日相済

二十二日相済

二十二日相済

二十二日相済

二月八日大吉日

辻幸大

(使)

一 麻四拾七〇三百目

吏儀助股

加口 代金拾八兩貳步也

利合卷兩也

馬太郎口

一 同二十貫目

代金七兩也

利貳步也

一 上麻四〇五百目

同人

初貳口代金貳兩貳分也

利壹分也

利 外 右者五百目有之

外 卷〇三百五十五文 含置

一 三拾卷〇五百目

代金拾三兩卷分貳朱也

利

〇金拾五兩貳步也

右〇百三貫三百目

代金〇四拾卷兩也

二月八日 右中候

麻よき也

大吉日・目出度大利

十二日

内金十五兩也受取

十四日

外比内金十兩也

二月七日

越中与九郎

一 上七〇五百目

同 清兵衛

大口 代金三兩卷分四百文

利金貳朱也

同日

一 二十貫目

高金十五〇

内利 五〇 代金卷兩卷分貳朱也

利

代金〇拾兩貳分貳朱卜四百文

十日直ニ代金相濟申候

二月十三日

一 麻二十六貫目

大 (使) 吏幸次郎

代金八兩三分

外ニ 貳百文 相濟

二十三日 内金貳拾兩受取

三月三日 内金老兩三分也受取

十七日

一 五ノ目 新五郎口

高サキ

一 五ノ目

依佐

代金老兩貳分貳朱卜六百文 相濟

利

二十二日

一、五百目

白井

小〇内

代貳朱卜四百文

利

二月二十二日

一、貳拾買目

行沢

龜吉殿

中平乙

老ノ目有

代六兩貳分也

一 三原藤麻

一 老ノ三百目

代老步也

利 貳口ノ六兩三步也

内金三兩三步也受取

三月九日

一 拾買目

行沢

高次郎

二月十二日

中乙口

代金三兩貳步也

内金貳步受取 七日相濟

利

二月二十四日

一、五百目

沼田人

桐屋

一郎右衛門

代貳朱卜貳百八十四文

利

三月二十四日

一、重王口

柏崎

二八久

一、麻貳拾買目

母

代七兩貳朱卜百拾四文

一、長右口 式之久
一、同上五ノ目

代式両式朱ト三百拾老文

利

外

一、六百文

延麻

ノ金九兩老分式朱ト武百二十五人

毎日相済

(以下略)

④から⑦までの古文書は、岩下村にて、作間商人(農閑期に麻やまゆなどを買付して問屋へ売出してゐる。)であつた家の記録である。

内容は、三軒の記録はほゞ相似たものであつて、(1)何日に、誰から麻を買つて、誰に売つたか。(2)仕入して、商品として荷作りして送るまでにどれほどの経費がかつてゐるか。(3)利益はどれ程か。というふうなことを記してゐる。

④の史料は、文化二(一八〇四)年八月とあり、江戸へ麻を出した記録としては、現在確認される一番古い史料である。岩下から、原町、渋川、金古、高崎を経て、倉賀野川岸から江戸

本舟町の白子屋清右衛門へ、商品を出してゐる。

④から二五年位経た天保年間になつて、⑤、⑥、⑦の史料が出てくる。⑤、⑥は、西山三次郎家の史料である。西山家は、北国屋として、越後商人と取引をしてゐる。

⑦は、⑤、⑥と同様の、大福帳型式の記録である。⑦の西山弘太郎家も、北国屋と同様に、作間商人として、弘化年間から麻を扱つていて、屋号を大見屋と称してゐる。⑦の史料の中には、江州、所屋利兵衛の名があり、近江商人との取引が知られる。両西山家共に、江戸末期から昭和までの麻扱ひの記録(大福帳、萬覚書の中に記されてゐる。)が残されてゐる。

岩下の史料を中心に紹介したが、岩島村誌の中に出てくる、郷原の菅谷勘右衛門の史料によると、郷原、厚田等にも、作間商人の活躍が見られる。

作間商人の活躍が盛んであつた岩下村の、年貢皆済目録を見ると、明和九年の皆済から全くの全納となつてゐる。(岩島村誌)

實祖の金納化が、明和九年(一七七〇)からであり、片貝家の麻江戸出しの初出が、文化二年(一八〇四)、北国屋、大見屋などの家では少し後れて一八三〇年代からである。實祖の金納化が、換金作物である麻栽培を盛んにし、作間商人である片貝家、大見屋、北国屋などが活躍するようになつたと思われる。

⑧ 麻屋真一文書（吾妻町岩下一七七四）

以書付御願奉申上候

一当郷之儀、往古 土地相応ニ而麻作采り、大小之百姓年中之為取面御年買御上納、其外家内修履、或者頼母子掛金小遣等迄、麻光払金を以而々買采り罷在、然ル処土地之産物故先年、越中越後商人被參、正当成相場を以光采り候処、近年越中商人之儀者、走りと申二百十日頃者被參、百軒在之候村方之内、横ミ撰ミ漸八軒カ拾軒、極上率出来之方江計り日置位ニ被參、勝手合之相場を以、仕入いたし候得共、軒併ニ而も中率出来之方江者、不同杯と申決而不寄立様ニして、十月霜月之頃ニ至り、此節麻大下落いたし候外と触歩行、中比者小百姓衆者、御年買無尽其外費用ニ差支、無提他國商人存意之相場を以被取買、年内光捌度在方者世間併と存光払采り、右様年々仕舞ニ被致候得者、麻場之百姓衆自然困窮之基と何共以歎歎く存候、且又越後商人之儀者、背負荷と申、少々仕入之方二百十日前ニ參、麻場中ニ漸五七軒位、挽初メ之衆へ便りせるに無之故、無惣寢戸初メ成、麻商ニ貳貫四五百玉位イ被買取、其相場を以村々押歩行、跡 多分仕入之方參も誠以目を驚し、近も引合ニ不成相候ニ付、拾駄仕入之方ハ五、六駄位仕入いたし帰国仕、近頃年々之事に有之相場甚速故、中ニ者麻光初メ不致ものも有之、又者隣家之麻越中へ不残買

取候得共、其麻同様ニ相見へ候得共立不寄候故、一切光不申杯と申もの、凡百軒在之村方ハ凡拾軒余も在之、然ル処、年増金銭甚不融通ニ相成候ニ付、此度之儀者、越中越後麻買商人坪方江者決而不寄立様ニして、近商人或者村々組々最寄最寄麻相場相頼ミ、光度思召之旁者、寄場せ里衆之方を相頼光捌候様ニいたし候ハ、走り、不迄村々相場平均ニ相成、商人坪方共ニ弁利可然存候、右ニ付此度愚民を為助、村々御名主様御役人衆中様江此段御願奉申上候間、何卒不愚様御見察之上御取上、小前末々迄道利合、能々吞為込御教諭被 仰聞右願之通御聞濟被或下置候ハ、偏末代吉鏡奉存候、 以上

岩下村

作問商人

源兵衛兄

安政三辰九月

日

右同断

弥 八 印

仁左衛門印

同断

文左衛門印
茂 助 印

同断

清次郎 印

同断

三次郎 印

同所

文右衛門 印

同所
御名主

同所

次右衛門様
御役人衆中様

三右衛門 印

⑧ 小泉武重文書(吾妻町厚田) 岩島村誌より抄録

以書付御願奉申上候

(本文は、脇屋真一文書と同文につき省略)

安政三辰九月

厚田村

作間商人作右衛門 印

同所

同所 五右衛門 印

御名主政右衛門様

同所 五〇〇〇〇 印

御名主吉右衛門様

同所 伊兵衛 印

御両給 御役人衆中様

⑨、⑩の史料は、本文は同文であつて、宛先と、差出人が異なつてゐる。

文書の内容は、麻の取引について従来は、越中・越後の商人に対して、正当なる相場で先買してきたが、近年になり越中商人が「走り」と称して二十十日頃にやつて来て、直接生産者の

所へ行き、極上の麻の出来る家ばかりに行き、勝手な相場で買い歩き、その他の家には、悪い麻で不向だと称して近寄らず、十月頃になり、麻相場が天下落したとふれて、安値で買いたく。越後商人は、背負荷と云い、二十十日前に来て、高値で買う。後から来た者は、高値で買い切れずに、先残りが出ることを計画し、農民は、最初に高値で少し売つたことから、その値を意識して売りそこなつてしまふ。そこを越後商人は狙つてゐる。他国の麻買商人が、直接生産者から買入れることに對して、地元の仕事商人が防止して、麻相場をつくり相場の安定を計画し、村役人に頼み出した史料が本文書である。⑨は岩下村の文書であり、⑩は、厚田村の史料である。本文は全く同文であり、安政三年(一八五六)辰九月の古文書である。他国商人の進出に對し、作間商人を中心に、麻相場を確立して、買たつきを防止しようとした文書である。以上、岩下村を中心に麻関係の古文書を江戸時代以前を中心にとまとめた。岩下村関係でも、中島三右衛門家の文書についても押見しなかつたが、その機会を得なかつた。この以外にも、未発見の古文書があると思われるが、調査もごく短期間であり、不完全な報告となつてしまつた。

最後に文書の所蔵者、調査で御協力を頂いた方、解説に御教示下さつた方々に厚く御礼申し上げます。

(唐沢 定市)

(別表2) 全国大麻栽培状況調査表

(昭和4年発行「吾妻麻一斑」より)

県・面積	生産高	価額	用途	製造方法	栽培地名	備考
長野 782町	15,696.6 貫	321,557 円	畳表 麻織物	麻ヲ細カニ割リ、綾平合セテ糸トス	上水内郡(墨黒里村、榑村、日里村、津和村) 北安曇郡(美麻村、神城村、中土村)	昭和2年調査
山梨 5町	4,565	9,981	畳表 縦糸	材採後流入ニ浸シ、剥皮ス	東山梨郡(八幡村、岩手村)	〃 3年 面積年々減少
埼玉 3反	56	90	自家用		大里郡	昭和2年調査
山形 52町	5,269	20,550		生皮乾シ用途ニ供ス	北村山郡(宮沢村)、最上郡(萩野村、東小国村) 東田川郡(大泉村、長沼村)	〃 2年 〃
岩手 5,054反	12,320.7	125,439	麻布、漁網、網	刈取後乾燥前ニ蒸シ、水漬ケ剥皮、乾燥ス	岩手郡(磐石村)、和賀郡(黒沢尻村) 東磐井郡(楢沢町)、胆沢郡(水沢町)	〃 2年 〃
滋賀 53町	1,696.0	14,650	自家用	水中ニ数日間浸漬シテ表面ノ剥皮ヲ容易ナラシメテ製造	甲賀、蒲生、神崎、犬上、伊香、高島、ノ各郡	〃 2年 〃
奈良 1反	50	25	自家用		宇陀郡	〃 2年 〃
岐阜 66町	15,127	29,515	製縄用	手 鈎	益田、大野、吉城、武儀、郡上、揖斐ノ各郡内一円	〃 2年 〃
山口 14町	4,278	7,667	畳縦糸		阿武郡	〃 2年 〃
岡山	8,902	15,441	畳表(縦糸用)	収穫物ヲ蒸脱ノ中ニ入れ、蒸シ、直チニ取出シ、剥皮乾燥シテ之ヲ速度太ニ篩ニテ脱キ、控ル	阿曾村、岡田村、近村、賀茂村、庄村、中庄村、大野村、白石村	〃 3年 〃
京都 197反	6,573	8,868	荷造用縄	刈取り浸水シ置キ、皮ヲ剥キ印キ精選ス	北条田郡、船井郡	〃 3年 〃
福井 1,640町	58,111	65,421	麻布、麻糸、蚊帳	乾燥シタル茅ヲ水ニ浸シテ蒸脱シ、上ニ蒸脱其ノ他ツシテ種々、日ニ1・2回蒸ア水ニ浸シ蒸脱スルヲ約1週間	二免ノツ止メ、根元ヨリ 皮ヲ木質部ヨリ剥離シ木灰又ハ曹達ヲ以テ加工、煮沸シ、然ル後麻段ヲ行フ	〃 3年 〃 (特記スベキ地名ナシ)
兵庫 872町	27,719	41,149	江 葎類ノ経糸、畳糸	茅ヲ水蒸気ニテ蒸脱シ、水ニ浸シテ剥皮部ヲ剥離シ、乾燥シテ先ニ蒸脱調整シ「アルカリ」水ニテ煮沸ス	加西郡(在田村、西在田村)、朝来郡(梁瀬村、東河村、生野村)、豊父郡(岡西村)、美方郡(八田村)	昭和2年調査
大分 890町	32,755	34,226	主として網、網		速島、大分、北海郡、南海郡、大野、直入、玖珠日田ノ各郡一円	〃 3年 〃
福島 980町	15,782	41,554	麻縄、麻織物		耶麻郡、奥川村、大沼郡(昭和村、玉路村、西川村) 北会津郡(大戸村、藤村)、南会津郡内等ナリ	〃 4年 〃
鳥取 402町	11,697	16,555	網、畳表用糸、織物	木灰汁ニテ煮沸、荒草トシテ販出ス	日野郡(白野上村、阿昆藤村)、東伯郡(山間村) 八頭郡(山間村)	〃 4年 〃
三重 20町	100	165			鈴鹿郡、阿斐郡	〃 2年 〃
鹿児島 695町	27,841	30,541	網、麻縄	収穫セル生茅ヲ、蒸脱ニテ蒸シ、之ヲ川水ニテ洗ヒ、表皮ヲ除キ乾燥セシム	鹿児島郡、推留郡、川辺郡、日置郡、薩摩郡、伊佐郡 始良郡、唯志郡の一円	〃 3年 〃
◎ 吾妻麻組合	698,905	5,666,560				〃 3年 〃

岩 島 の 麻

昭和53年1月20日 印刷
昭和53年1月25日 発行

編集 群馬県教育委員会文化財保護課
発行 群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町一丁目1の1
TEL 0272 - 23 - 1111 (代表)

印刷 前橋市表町一丁目27-16
有限会社 荒木印刷
